

茶漬三略

吉川英治

青空文庫

まさきまごへいじおぼがき
柁木孫平治 覚え書

人々は時の天下様である太閤たいこうの氏素姓うじすじようを知りたがった。羽柴筑前守秀吉はしばあたりから後のことは、誰でも知っていたが、その以前の彼を知りたがった。

わけて、小猿こざるとか、日吉ひよしとか呼ばれて、姓さえろくになかった時代の生い立ちを知りたがった。

けれど太閤は、自分の素姓すせいについては、生涯、人に語った例がどうもなかったようである。

強いて、訊く者があれば、

「大空に素姓はない」

といったような顔おかしなしていた。

またその威光おかしなを冒おかしてまで、不ぶしつけに訊く者もなかった。うすうすのことは誰でも察さつしていたのである。

だから彼の祐筆ゆうひつや、松永貞徳まつながていとくなども、やむなく彼の素姓に筆のふれる時には、

秀吉公、曰く、

われ尾州の民間より出たれば、草刈るすべは知りたれど、筆とる事は得知らず、ただわが母、内裏のみづし所の下女たりしが、ある夜のゆめに幾千万の御祓箱、伊勢より播磨へさしてすき間もなく、天上を飛びゆくとみて我を懷胎しぬ——
などと書いておいた。

そんな事から、秀吉の母までが、持萩中納言の息女であつたとか、彼は藪中納言保広の落胤であるとか、織田被官の足輕から帰農した百姓弥右衛門の子というのが真であるとか、噂や蔭口もまちまちであつたが、それについても太閤はどちらが本当で、どつちが間違つているともいった例がない。

が——ここにただ一つ、これだけは確実に、彼の口から出て、彼が眼の前で、祐筆に書かせ、公然、四海に闡明したことがある。

それは天正十八年に、彼が、朝鮮国王に与えた書翰で、

予、托胎ノ時ニ当リ

慈母、日輪懷中ニ入ヲ夢ム。

相士ノ曰

日光ノ及ブ所

照臨セザルハ無シト。

壮年必ズ八表ニ仁風ヲ熾ニシ

四海ニ威名ヲ蒙ル者

ソレ何ゾ疑ハン乎。

と、自己紹介をしながら、抱負をのべているのである。

結局、太閤となつてからは、彼自身、

「自分は太陽の子である」

と信じて疑わなくなつていたのであろう。

けれど、大空の太陽にも、真暗な泥海時代があつたように、地上の太陽の子にも、暗黒時代があつたに違いない。

そのころの彼が、どんな身なりをし、どんな生活をして、世の暗黒を彷徨つていたかは、始終彼の祐筆^{ゆうひつ}を勤めている大村由己^{ゆうこ}だの松永貞徳の口や筆などからは、到底知るよしもないことである。

なぜならば、松永貞徳だの、大村由己だのという者自身が、上層階級の武家にばかり拠つて生活を立てて来たもので、この世にそんなどん底があることすら知らない人たちだからである。

ところが、広い世の中には、誰か真を知っている者がどこかにあるもので、ここに、阿波徳島の蜂須賀彦右衛門家政のお抱え鎧師に、榎木宗一という者があつたが、この宗一の母の口から、ふと、

「そなたの父は、太閤様とは、奇しき御縁があつたお人ぞ」

と、洩らされたことがあつて、それから宗一は、父の素姓を知ると共に時の太閤様の前身にあつた、いわゆる奇しき関係までつい知ってしまったのであつた。

彼の父は、榎木孫平治といい、その前身は野武士で、血なまぐさい悪業の数々をし尽し、戦乱の世の暗闇に生きて暗闇へ死んでゆく、多くの無頼の徒と同じような運命を辿つていたが、ある年、猿めいた面貌をした貧しい旅の一青年に会い、豁然と、多年の悪夢や迷妄から醒まされて——後に年経て、その時の猿顔の男が、羽柴秀吉と名乗っていることがわかり、隨身して一すじの槍を受け、恩に感じて、後に、彼の馬前で戦死した人であつた。

良人の死後、孫平治の後家は、幼い宗一をつれて、叔父を頼って行った。その叔父は蜂須賀彦右衛門の陣について、のべつ戦士の具足修繕をしていた鎧師よろいしであったから、次第に主家と共に、彼女も阿波へ移って落着く身となったわけであるが、老年まで良人の前身や太閤様のことについては、子にもはなしたことはなかった。

ところが、人間は病んで、死期を思つて来ると、いかなる秘密も誰かひとりには告げておきたくなるもので、ある時、枕元の宗一にすべてを告げて、彼女がいうには、

「わしの料紙笥りょうしぼこの底をさがしてごらん。そなたの父のお書きなされた綴とじものが二帖ある。風を通したこともないから、もう虫が蝕くさっているかもしれません。こんど雨の夜にで

も、そつとここへ持つて来て読んでごらん。わたしも眼をつぶつて聞いていきましょう。：

：そなたの父御ててじは、乱国の野武士で、文字もろくに書けなかったお人だから、元より文章も読みづらく、おかしな節々もあるけれど、人に示そう為でなく御自分の懺悔ざんげを、真実こめて、書けない筆でいつか書いておかれた物。……中には私の知っているとこもある、

足りないところはわたしが話しましょう。わたしの枕元で読んでごらんなさい」

それから宗一は、母の料紙笥を取出し、母の前で開けてみたところ、果たして懺悔かびくさい二帖の綴とじ文があらわれた。

その夜、彼は、父と太閤との、奇しき前身や縁故をつぶさに知ったけれど、世は治まり、大坂城は時めくそのころ、かようなことは、人に語るも畏れありと、焼き捨てようと考えたが、屋敷ではつい人目があつて果せず、父の忌日に、寺へ持つて行つて、密かに処置を託したところ、寺では正しく護摩壇で焰にしてはくれたが、物好きな僧がいつのまにか、それを写して別本を秘しておいたらしいのである。

その僧は、柁木家から、寺へ、焼いてくれと持つて来た由來書を序文に書きたして、単なる綴ものを一層書物らしくしてしまつた。文章の余りに稚拙なところや、誤字なども、少しばかり学問のあるまま、つい所々筆を入れたらしく、「開運日輪抄」と表題まで自分で附けた。——だがその表題の題簽も、年経て文字もかすかに手摺れてしまい、江戸時代になつてから、何代目かの所蔵者が、またその横に、題簽を貼り加えた。そしてついでに書物の表題も、「柁木孫平治覚え書」と、ありのままに書き直している。

偶然、古書展のたくさんな虫蝕本のうちから、私の手にこの書が移つたのも何かの機縁というものであろうが、三百年前に焼かるべき物が、私のような者の眼にふれたことは、野武士柁木孫平治氏にとっては、恐らく大なる不幸を地下で嘆じていることだろうと思わ

れる。かえって、一方の太閤にたいしてはわたくしは、これを種本として扱うにも、そう冒^{ぼう}読^{とく}の罪は感じないのである。なぜならば、彼ほどな人が後世のために、余りに無名時代の自分の経歴を不明にまかせておいた事が、抑 《そもそも》、史家の臆^{おそ}測^{そく}を煩^{わづら}わして諸説紛々今もはっきりしない結果になった唯一の原因だからである。

また彼が海外の王へ書^{しよ}翰^{かん}していったように彼自身が、

——われは太陽の子たり

と、かたく信じていたものならば、なおさらのこと、その無限大の微笑^{びしょうこう}光^{こう}をもって、かかる文^ふ業^{みわざ}も世の草々の一穗^{いっすい}と眺^{なが}めやるに過ぎまい。

つい「はしがき」が長くなったが。

以下、開運日輪抄の中のはなしを、榎木孫平治氏の口述体を取って、しかし文章はわたくしのものに直し、意識的にぼつぼつ書いて行ってみる。描写その他に、私の想像の繊維も横系にはいつていることはいわずもがなである。賢明な読者は、疾^とく諒^{りよう}として下されているものと思う。

くらやみの太陽

一

美濃^{みの}の稲葉山の牢に、わしの悪業の終りは来ていた。

天文二十二年のこと。

まさきまごへいじ

榎木孫平治^{まきまごへいじ}という名も、もう何日^{いつ}、この世から拭き消されるかと、観念の日を送りながら、

「榎木孫平治よ。榎木孫平治よ」

わしは自分の名を、日に何十遍も、心のうちで、念仏がわりに称^よんでいた。

だが、未練^{みれん}といつては、それくらいなもので、もう図太く観念はしていた。やりたいことはやり尽したし、親もないし、妻子もないし。

その日はちょうど、わしがこの牢獄へ坐ってから、四百八十七日目だった。

牢獄の中では、一と月とか半年とかいういい方はしない。いずれ打首と覚悟している者は、陽時計^{ひび}の陰をみつめているような気持ちで。——また再び出られる見込のある軽罪の者

は、その反対に一日一日を待つて。――すべて自分らがここへ入つて来た日から起算して、春なく秋なく日数で覚えてゐるきりだった。

この牢の中では、一千六百四十幾日というのが古参だったが、当然、格からいつても、一段高い牢ろうがしら頭づかみの坐るところには、わしが坐つていた。

その古参の男は、鰻まんじゅう頭づかみをお圧しつぶしたような目鼻に、もじやもじやと髯ひげが生えて、蜘蛛くもみたいな顔をしてゐるところから、六兵衛と呼ばずに、蜘蛛六とよばれてゐた。

「やい、小僧小僧。こちらが牢頭様だ。先に御挨拶をしろい」

その蜘蛛六が、わしの前へ、たつた今、役人に突き飛ばされて入つて来た新入りの、なりの小さな男を引つ張つて来た。

「おや、子どもか」

と思つたくらい、この中では、チビな男だったが、顔を見ると老ふけてゐるし、挨拶もいやに小ましくくれてゐた。

「商売は、何だ」

型のとおり、牢頭のわしから先ず訊くと、

「針売りの旅商人でございます」

と、いう。

「生^{しょうこく}国^{こく}は」

「尾張^{おわり}の中村でございます」

「年は幾つ？」

「十八になりました」

「名は」

「ございません」

「名のないやつはあるまい」

「あつたそうですが、忘れました。親どもを初め、わたしの顔が猿に似ているので、猿々とばかり呼ばれて来ましたんで」

猿は、洒^{しゃぜん}然^{ぜん}として自分でそういうのである。

「なーるほど」

「似てけツかるわい」

「こいつあ猿だ」

「猿が人間の牢へまぎれ込んで来やがった」

「わはは」

「あははは」

大勢の囚^{めしゆうど}人が、小男の顔をのぞいて、いちどに笑ったので、牢獄の闇は何十日ぶり
で——いや何百日目といってもよいだろう、陽気などよめきに沸^わいた。

こんな笑い声を、牢で聞いたのは、わしも初めてだった。

二

「いったい何をして捕まつて来たのだ。火放^{ひつ}けか、窃盗^{せつとう}か、空巢^{あきす}ねらいか」

次に、わしがまた訊くと、

「この岐阜^{ぎふ}の御城下を歩いていたら、淡紅梅^{うす}の被衣^{かすき}をして、供の男に塗笠^{かすき}を預け、買物が
てら歩いていた奥様がありました。どこの奥さんだろうか、余りきれいなので、何もかも
打忘れて、私は後から従^ついて行きました。——するといつの間にか、道を反^それた供の者が、
役人を連れて来て私を指さしたかと思うと、有無をいわさず、引^ひつ縛^くられてしまいました
ので」

猿が真顔で答えると、周^{まわ}りの囚^{めしゅうど}人^{ひと}たちもまた、指さし合つて、

「——この顔で」

「女の後を、だと」

「う、ふふふ」

と、前のどよめきが消えないうちに、腹をかかえてまた笑つた。

けれどその笑いも、井戸へ石を落した水音のように、やがて、はたと沈んじまい、前にも増して、陰気に返つてしまふのだつた。

猿もそうだつた。

牢の隅に、ちよこなんと胡坐^{あぐら}を組んで坐つたまま、毎日毎日、それからは余り口をきかない。

わしを始め、この中には、強盜強姦、追剥^{おいは}ぎ火放^{ひつ}け、ありとあらゆる罪を犯した兇悪な人間もいるが、その中へ間違つて紛れ^{まぎ}込んで来た猿は、まだ搔^かツ払^{はら}い一つろくに知らない初心^{うぶ}な奴だつた。

だから定めし、まだ馴れない牢獄が怖ろしいのだろう。——そう察して、ある時わしが、
「猿、猿。てめえはきつと、すぐ御放免になるだろうぜ。だから余り心配するな」

慰めてやると、猿はふり向いて、にやりと、

「はい。そうべつに、心配はしておりません」

と、いう。

「じゃあなぜ、身動きもせず、毎日眼をふさいだきり、黙っているんだ」

「でも、眼をあいていても、この牢獄では何も見えませんもの。——反対に、じつと眼をふさいで、心を澄ましていれば、身はここに置いても、世間の何でも見えて来ます」

「世間が見えるって？」

「え。この岐阜^{ぎふ}の御城下でも、生れ故郷でも、広い天下の何処へでも、行きたい所へ行つてみる事ができます。会いたいと思うおつ母さんでも、話しする事ができるんで」

「嘘をいえ」

「ほんとですよ」

猿はまた、眼をふさいで、乞食坊主が坐禅でもするような恰^{かつこう}好して、大真面目になっていた。

「こいつ少し気が変だな？」

わしは領^{うなず}いた。ここへ入つて来た当座、気が変になるのは、猿ばかりではない。誰でも一応は、泣いたり喚^{わめ}いたり、黙りこんだり、狂態をやる。

ところが、この狂態を、今度はわしがやりそうになつて来た。——というのは、猿めが、母親の事をいい出したからである。永い間かかつて、やっと忘れていたものを、猿のことはで、ふいとまた、思い出し始めたからである。

わしが死んでも、誰ひとりこの世の中で泣く者はあるまいが、おふくろだけは、どんなに……などと、考えても追いつかない事を悩み出すと、

（ああ、もう一遍！）

おふくろの顔が見たい。世の中の光を浴びたい。——生命^{いのち}が惜しい。たまらなく物狂わしくなつて来る。

（戦争でもおつ始まれつ。稲葉山の城も、岐阜の城も、火の海になつてしまえつ）
そうしたらどうか今の境遇に変わりが起りはしないかなどと、妄想にばかり苦しめられて、夜眠つていても、

(おつ母^{かあ}つ。 おつ母^{かあ}つ)

大きな自分の声に、眼をさました事などもあつた。

——だが、こいつは牢の中では禁物だった。強悪無類の牢頭^{ろうがしら}たるわしが、そんな弱音を顔いろに現わしたら、たちまちまわりの狼^{おおかみ}どもに舐^なめられてしまう。

「やい、どいつか、おれの肩をすこし揉^もんでくれ。蜘蛛六^{くもろく}、汝^{われ}でもいい。うんと力を入れて……そうだその辺を」

蜘蛛六に肩を揉ませながら、猿のほうを見ると、猿は、朝の稗飯^{ひえめし}を食べてしまうと、例の如く独りだけ隅^{ぐも}ツこにいて、達磨^{だるま}のまねをしている。いるのだから、いないのだから分らない。

他の者^{ほか}は——といえば、ちょうど何日^{いっ}もの時刻で、一つ所に泥鰌^{どじょう}のようにかたまり合っていた。

牢は三間と二間半の頑丈な壁で出来ていて、明り窓は、たった一つ、壁の高い所に四角く切つてあるだけだった。勿論、その明り口にも、頑固な棧^{さん}が打つてあるので、大きなほどな光は映^ささない。

しかし、晴れた日には、太陽がこの牢獄の上を越える一刻^{いっとき}か半刻ほどの間ちようどそ

の切窓の棧から、幅一寸ぐらいな日光が、短い光線の棒をならべたように、牢の板の間に映すのだった。

すると囚人たちは、われがちに、その僅かな太陽の光を取囲んで、爪の伸びた足の

先だの、蟻みたいな青い手だのを差し伸べ、

「アア、お太陽さまだ」

「陽の光だ……」

眩しげに、見入っているだけでも、無限に楽しめるように、その陽なたの翳るまでは、誰ひとり動こうとしなかった。

ある者は、その光で虱をつぶし、ある者は悪党のくせに、合掌している奴もある。

娑婆が曇っている日のほかは、毎日の事だった。もし誰かが、一枚の板を切窓の外から打ちつけて、獄人どもからこの一つの愉快を奪ったら、それだけでも、中の人間はみな自然萎み死んでしまうだろう。

だが、猿だけは、一度もまだその仲間に交じらないので、ある時、蜘蛛六が、

「おい猿、おめえにも少し、天道さまをお裾わけしてやるから、こっちへ来ねえ」

と、声をかけると、

「いえ、たくさんです。私にはいつも陽が当たっていますから」と、猿がいった。

「嘘をいやがれ。どこに陽が当たっている。唐変木め」
とうへんぼく

「でも、私には、腹ん中に、天道様があるんで、腹ん中の天道様は、晴も曇も、暗闇もありませんからね」

「法螺も、そこまでふけば、罪はねえ」
ほら

蜘蛛六は、手演をひツかけるような顔して嘲ったが、何ぞ知らん、それから五十日、百日と日が経つうち、いつか猿はこの獄内で、ほんとに闇を照らす太陽になってしまったのである。

——それは後の事だが、その時、蜘蛛六が、法螺をふくなど嘲うと、猿はぬつくと立つて、

「法螺だもんか。お前らだつて同じことだ。人間はみんなお天道様の子だ。心のなかに、太陽を持っている。気がつかないだけの事だ。暗いというのは眼だけの事だ。心にある太陽に気がつけば、暗いことなんかちつともない。明るく明るいとても明るい！ わけてこの牢屋の中には、悪人なんか一人もいやしない！ こんな明るい所にいて、暗いとは一体

どうしたものだい。あはははは」

何が愉快なのか。猿は手をたたいて笑った。

皆、呆^あツ気にとられて、猿の顔を見まもつたが、その日から何だか少しずつ、こここの闇が明るくなり出した。

四

黙っていれば十日でも黙っているが、喋^{しゃべ}舌り出すと、猿は、いくらでも喋^{しゃべ}舌つてやまなかつた。

また、何でも知っていた。

仏法の話をするれば、下^へ手な説教坊主ぐらいはやるし、諸国のうわさをすれば、越後はどう、甲府はどう、小田原はどう、この岐阜の稲葉山はこうと、人情風俗、物価の高低から、百姓の生活向^{くらし}きまで——わけて自分が百姓生れなので、最も詳しい。

また。

駿河^{するが}の今川家は、財政は豊かだが、大将の今川義元始め、士^{さむらい}がみな、京の公卿^{くげ}風をまね

して遊惰だとか。三河の松平家は、今では駿河の属国になっているが、三河武士がみなよく貧苦に耐え、胆きもを嘗なめ薪たぎぎに臥ふして、時勢の変るのを待っているから、十年先には、どう変るか知れないとか。

諸国の武将のはなし、兵法のことも、訊かれれば、知らないという事はない。

「ふくぞ。こいつが」

と、初めは皆、小馬鹿にしながら聞いているうち、何かしら、猿の持っている信念というようなものが、皆の身に沁しみて来て、時には感心し、時には笑い、時には怒って、

「猿。おめえは、何でもねえ罪だから、打首になるはずはねえが、成るべく長くここにいてくれ」

冗談にも、猿が出て行ってしまったら、どんなに淋しくなるだろうと、その日を惧おそれるくらいになった。

そして何かといえは、

「猿。猿」

と、彼を取巻いて、話を求めた。——毎日、高い切窓から射さす僅かな陽ひなたの切れ端と同じように、彼を囲み、彼のことばに随喜した。

それとまた、何よりここの変つて来た事は、陰気な牢内が、いつのまにか陽気になって来た事だった。猿はよほど陽気な性しょうとみえ、どんなに皆が陰気になろうとしても、猿の声がしだすと、そこに笑い声が上がった。いや黙つて坐つていられるだけでも、猿の姿を見ると、陽気ただよが漂おのずかつて、自ら皆の顔まで明るくなった。

自然に、猿は、尊敬と愛慕まことの的まとになった。反対に、牢頭のわしの威光は、僻ひがみか知らぬが、以前のようでなくなつた。わしは事々に猿へ辛く当りちらした。些細な落度を、威いたけ猛高だかに罵ののしつて、猿を撲なぐらせたり、蒲団縛ふとんしばりにして飯を食わせなかつたりした。だが、そうすればする程、牢内の人気は猿へ傾いて行く気がした。

「牢頭ろうがしら、二、三日経つと、私たちは一遍、牢を出されて、世間の風にふかれる事ができますね」

ある時。

猿に腰を揉もませていると、猿がそういった。

嘘にでも、そんな話は、わし達の胸をどきつと打つて、

「えつ。どうして？」

「何だか、そういう気がするんで。——というのは、ゆうべも一昨日おとといの晩も、御城下で戦

争があつたと私は思いますから」

「ふム……。どうしてそんなことが分るか」

「夜中に、あの切窓の隙間から見える空が、毎晩、赤く見えました。それから、獄人へ配つて来る飯の時刻が、遅かったり早かったり、狂つて来ました。また、じつと眼をつぶつて、外の気配に気を澄ましていると、どうしても戦争か何か起っているふうです。――

稲葉山の斎藤義龍と、鷺山城の斎藤道三秀龍とは、表面は父子ですが、実は義龍は、道

三が殺した旧主の子だという事ですから、また内乱を起しているにちがいありません」

こいつがまた、いい加減な小才を振廻して、他の者らに、氣を持たせていやがる――と、わしはいつもの癖みで、

「馬鹿あいえ。ここにいて、世間がそんなに見えて堪るものか。ムダ口を叩かずと、もつと力を入れて腰を揉め」

と、叱りとばした。

ところがその翌々日。役人衆が五人見えて、

「牢頭。今日より獄人どもに四日間ほど、労役申しつけるゆえ、左様心得ろ」

犬潜りの口から、わし達は外へ出された。一イ二ウ三イ四ウ……と頭数を数えられて、

「十九名だな」

「へい」

「逃亡などたくむ者は、即座に突き伏せるから心得ておけ」

役人衆は、素槍の先を、獄人たちの鼻の先へひけらかしていった。

驚いた事には、猿のことばが、あたっていた事であった。役人衆は勿論のこと、牢番までが具足を着ていた。世間には、戦争が起っていたのだ。

わし達は皆、何百日目で広い空を仰いだ。金華山きんかざんの上のお城を見た。稲葉山の城である。

城は依然としていたが、奉行所の外門は、焼けていた。近所の侍屋敷から河向うの町家も、所々、焼け跡になっていた。

獄人は、わしらばかりではない。他ほかの牢からも労役に出たので、二百人近くもいた。仕事は、焼け跡の灰片づけであった。味方の死骸や、敵の死骸が、灰の下から幾つ出て来たか数知れなかった。

すると三日目の午ひるごろ。戦後の焼け跡を、騎馬で視察に来た斎藤家の侍頭さむらいがしらが、
「や。猿じゃないか。どうしたのだ貴様あ」

と、驚いた顔して、働いている獄人たちの中から、猿を呼び出して、しばらく馬上から何か訊ねていた。

後で聞けば、その士大將^{さむらい}は、尾張海東郷^{かいとうごう}の野武士あがりの者で、猿が同じ土地の蜂須賀^{はすか}村の野武士、小六という者のやしきにいたところに知っている人だった。

——だが、その時は、わしはじめ、皆目をみはって、

(どうして猿が、あんなお士^{さむらい}と知っているのか)

と、吃驚^{びっくり}したものだつた。

大日越え^{だいにちご}

一

四日間の労役は楽しかったが、それが終わると、わし達はまた、以前の常闇^{とこやみ}の沼みたいな牢へ帰って、盲の魚のようにうようよしていた。

牢へ帰った翌日、猿は皆へ向って、

「わたしも近いうちに、いよいよ、皆さんとお別れする事になった。何日までもお前方と一緒に暮してたいが、そうもいかなからなあ」

と、いった。

猿が侍大将と親しそうに口をきいた事を、わし始め見たので、誰も、疑わなかった。

「いよいよ、お別れか。ああ……」

「名残惜しいなあ」

「羨ましいなあ。だが、おめえのためには、欣ばなければならぬが」

ある者は、涙をながし、ある者は、猿の手を撫でたり、改めて顔を見たりした。

翌朝。役人が、猿を呼び出しに來た。すると牢内は総立ちになって、猿に名残を惜しみ、猿の手を容易に離さなかった。

「まだ早いよ。わたしはもう一遍、牢内へ歸つて來るよ。わしばかり幸福になつちや濟まないからなあ。兄弟同様に暮したお前方にも、欣びを頒けてやるよ」

そういつて出ていつたが、おそらく猿はもう歸るまい——と、猿を失ったそれからの半日ばかりは、墓場のように滅入^{めい}つて、誰ひとり口をきく者もなかった。

だが、猿はまた、歸つて來た。そして蜘蛛六^{くもろく}にいった。

「お前さんは明日放免あすされるよ。お前さんは善人だ。二度とここへ来るじゃないぞ」

蜘蛛六は、嘘をいわれたような顔して、本気で聞かなかった。けれど半分は本当かなと思つたのだろう、一晩中、身をうごかして、眠れなかつた様子だつた。

猿のことは、嘘でなかつた。蜘蛛六は翌日、放免になつた。狂氣した蜘蛛六は、皆へ挨拶するのも忘れて、飛び出して行つたきりになつた。

それから、二、三人の者に、放免を予言した。皆、猿の予言どおりの日に出て行つた。羨望せんぼうと驚きで、牢内は動揺した。もう牢頭ろうがしらのわしなどは見向きする者もなく、

「猿。おれは、何日いつ出られるんだらう」

「猿。おれは追剥おいはぎをして捕まつたんだが、免ゆるされるだらうか」

「おれも、打首にならずに、助かるだらうか」

地蔵の来迎らいごうへ縋すがる餓鬼がきのように取巻いて訊ねた。

「出るよ。出るよ。おまえ達の心さえ正しくなれば、自然、助かるよ。だがわしも明日あすは七日目になるからな、明日こそは本当のお別れになるぜ」

牢頭こけんという沽券の手前、わしもその日まで、猿に対して、白眼視していたが、猿がほんとに、明日限りこの牢から姿を消すかと思つと、堪たまらない淋しさと絶望さいなに虐まれた。

真夜中だった。

わしは、皆が眠り落ちたところを見すまして、そつと、猿を揺り起した。

「おい。おい。ちよつと起きてくれないか……」

猿は起つて、真暗な中に坐り直した。わしも畏まつて、その時ばかりは真実の涙を流していった。

「猿……。俺はな、誰にもいった事はないが、故郷くにもと元に不孝を重ねたままの母親を一人残してある。わしはもう一遍、その母親の顔を見られるだろうか？」

二

猿はしばらく考えていたが、わしの思いつめた眼をじつと見て——他ほかの者が眼をさまさないようにと憚はばるらしい小声で、

「——見られるよ、牢頭」

「えつ。……ほ、ほんとか」

「ただし、今までのような悪心を持っていたは難しいが」

「ああ。そういわれれば、俺はこの獄人の中では愚かな事、どんな悪党のなかへ顔を出しても、^ひ負けを取らない強悪な男だからな。落^{おちゆうど}人の追剥^{おいはぎ}、あちゆる戦場^{いくさばか}稼^{かせ}ぎ、火放^{ひつ}け殺人誘拐^{かどわか}し——やらない悪事はいくらいだからなあ」

「十悪の兇賊でも、心を改めれば、即座に仏になれると、何とかいう坊さんが説いているよ」

「心を直すには、どうしたらいいのだい」

「悪い事を、悪いと知ればいいのさ」

「それはもう毎日毎日思っているんだが……」

「それならば、きつと助かるに違いない。……そうだな、わしが出てから十八日目にお前さんもきつと、この牢を出るだろうよ」

「十……十八日目？」

「ウむ」

「猿。……気休めをいうのだろう。どうして俺が」

「信じているがいい。だから、それまでの十八日間、牢頭は毎日、天地を拝んで、自分のしてきた罪業を懺悔^{ざんげ}しなさいよ」

「もいちど、この生命いのちが助かるものなら……ああ俺は、もいちど生き直つて、今度は善い事ばかりしたい。……猿、もしかほんとに、世の中へ出られたら、何処かでおめえに、会う事ができるだろうか」

「さあ、それは分らない」

「おめえの故郷いなかへ訪ねて行つたらどうだろう」

「故郷の家でも、わしが無処どこにいて何をしているか知らないよ。どうか、人並に家を持ち、御飯がたべられるようになるまでは、母にも知らせないつもりだ」

「じゃあ、おめえが、一人前になれば、自然分るわけだな」

「それは分らずにはいないだろう」

「もし、生命いのちがあつたら、訪ねてゆくよ。それにしても、猿とだけでは心細い。何とか名があつたら、訊かしてくれ」

「尾張中村の木下弥右衛門やえもんの倅せがれといえ、わしだけしかない。名は、日吉ひよしというのさ」

「弥右衛門の子の日吉か。きつと覚えておく。……それから俺わしの名も覚えておいてくれ」

「あ。聞いておこう」

「俺わしは、まさきまごへいじ 榎木孫平治 といつて、親父の代から都を落ちて、二代つづきの美濃みのの野武士。

しばらく戦が絶えたため、衣食に困って、この稲葉山のさる武家屋敷の厩へ、馬盗みに入
って逃げ出したところ、その食客の十兵衛という男に馬で追いかけられて捕まっ
てしまい、その場ですぐ奉行へ突き出されてしまったのだ。……馬泥棒だけなら助かる望み
もあるが、何しろ前科を洗われれば、首が十あつても足りねえ体だからなあ」

三

さだめし見つともないさまに見えたらうが、まったく、夢かとわしは驚いたのだ。しか
も、猿が出てからちようど十八日目である。

「榎木孫平治に、放免申しつける。ただし御城下十里外へ、御追放の事」
役人からいい渡された時、わしはどんな声を発したか、どんな顔をしたか覚えがなかつ
た。

手の舞い足の踏むところを知らず——という言葉どおり、奉行所の門から世間へ素ツ飛
んで行った。いつか先に蜘蛛六が放免になった時、

（あれほど牢内では目をかけてくれたのに、出るとなると、挨拶も忘れて行きやがった）

と、憤^{おこ}つたが、自分がその身になつてみると、やはり蜘蛛六と同じ事をしていた。
わしは長良川^{ながらがわ}の上流を、十里余も溯^{のぼ}つて、たった独りの老母^{おふくろ}がいる関^{せき}の宿^{しゆく}の在^あ、下^{しも}有知^{もずち}という草ぶかい田舎^{いなか}へ一本檜^{ひのき}に帰つて来た。

わしの姿を見た時の、その時の老母の欣びよう。それは生涯、眼から消えなかつた。
獄舎^{ごくしゃ}の中で、熊^{くま}みたい^はに生^はえた髯^{ひげ}を、まず剃^そり落^おしたが、その髯の毛を紙につつんで神棚へ上げておいた。

そして毎日、

「忘れませんように」

と、自分の髯を拝^をんでいた。

月日^{つきひ}が経^へつて、ようやくわが身に返るにつれ、わしにも猿殿^{さるだま}に対する敬慕^{けいぼ}が強^{つよ}くわいて来た。

考えてみれば、今の身があるのも、猿殿のお庇^{かへ}だ。ぜひ一度は巡^{めぐ}り会^あつて、真人間^{まじん}になつた自分を見せて上げなければ済^すまない。

それにしても、猿殿はいつたい、どうして、あんな予言^{よげん}をしたものか。初めは、猿殿に何か神秘的な霊力^{れいりき}でもあるのではないかという風に考えていたが、それも猿殿の慈悲^じのほか

何ものでもない事が後に知れた。

一年余り過ぎてからの事。岐阜^{ぎふ}の里まで用事があつて出向いたところ、すぐ木戸の役人^{みし}に見咎^みめられて、

「そちは御城下十里四方お構^{かま}いの孫平治ではないか。いくら改心してもお免^{ゆる}しの出ないうち、御城下に立入る事ならん」

と、叱られた。

その折、入牢中、顔を見知っていた役人衆がいて、

「孫平治、貴さまはよくよく幸運な奴だぞ。あの折は、猿によう似た男が御家中の杉坂内^{くみ}匠様をよう知つておつて、内匠様のおことばで、猿はすぐ御放免となつたが、彼の猿めが自分の身は、どうなと宜^{よろ}しゆうございますから、誰と誰とは、心が善だし、親もある者ゆえ、免して下されと、泣かんばかりの嘆願だった。——そして貴さまの事は、最後に牢を出る時、再び杉坂様に縋^{すが}つて、死を賭^としてお願ひしたらしいのだ。杉坂様も、その熱情にうごかされて、お奉行や重臣たちへお骨を折り、運よく、そちは御助命となつたものだが、猿めは、そう極ると、ただ御追放してはいけません。てまえが出牢した日から十八日目に出してやって下さい。その間に十分善心に立返るようにしてありますから——との事で、

その通りに御放免になったわけだが」

それで猿殿の予言したわけは解けたが、そう聞いてから、わしは一層、猿殿に敬慕を増した。神秘の靈力を備えている非凡人よりも、猿殿の人情に打たれてしまった。赦免しゃめんと聞くなり、後に残る獄人たちへ、挨拶もわすれ、手の舞い足の踏むところも知らずに、山へ行く人間とは——わしなどとは、格段のちがいのある人物だという事が、後になるほど分つて来た。

で——

「何日いっかは一度」

と、再会の日を心に誓い、忘れたこともなかったが、遠国へ行く事は、老母おふくろの為に思ひ立てず、つい月日を過していた。

その老母はまた、わしが家へ帰つてから程なく床につき、わしは獵師りようしや百姓仕事をしで食っていた。どんなに飢えても、ふしぎな程、以前の悪心はもう起らなかった。以前の自分を思うと、自分でないような心地がした。

すると丁度その年。——その年は弘治こうじ二年で、もう毎年の雨期に近い五月の初めだった。真つ暗な雨雲の空が、宵よいの口から真つ赤になり出して、長良川ながらがわの下流の方は、夕焼を

見るようだった。

「戦^{いくさ}じゃぞ。こんどのは、大きい戦らしい。この辺の者も、今のうち、家財を纏^{まと}めて逃げぬと、逃げはぐれようぞ」

夜半^{よなか}に、村の者は、お互いの戸を叩き合つて迫つた。

わしは、病人の老母^{おふくろ}をかかえているし、戦の火など見ると、かえつて性根^{しょうね}が据^すわる質^{たち}なので、

「なあに、大した事はないよ。おつ母さん、俺がついている限り、案じなさんなよ」

枕元へ坐つて、母へはそういつたが、腰には、野太刀をさし込み、側には古びた手槍一筋寄せて、廂^{ひさし}ごしの赤い空を見つめながら、夜明けまで坐っていた。

四

夜明け頃から午頃^{ひる}にかけて、手負いの血まみれ武者や、鎧^{よろい}に焼け焦げのある土^{さむらい}だの、担^{かつ}がれたり、槍杖をついたり——何しろ七、八百の兵が、村を通過した。

蝗^{いなご}が通つた後みたい、その日だけで、村の食物は失くなってしまった。もつとも老人

や子供や百姓のあらかたは、もう山越えして、何処かへ逃げてしまつてはいたが。

「罰あたりめ」

「いかに、御不和な仲とはいえ」

「親と名のついた山城守様を、子の義龍よしたつが討つて殺すとは」

「極悪人の大将である」

「人倫じんりんの賊。天も憎み給うであらう。ああ、浅ましい」

「山城守入道どのの、悪い報いか。わが子と名のついた義龍に討たるとは」

「怖ろしい輪廻りんねか、宿業しゆくごうか」

落ちてゆく武者たちは、口々に、憤怒の声を放っていた。

かねてから饅すえていた国主の内輪探めが、遂に、大乱となつて、稲葉山の斎藤義龍は、

父と名のつく鷺山城さぎやまじょうの山城守道三を、ゆうべ一挙に攻めて道三の首しるしを挙げたものと――

――わしもその日の夕方にはやつと知つた。

「何たることだ！」

わしのような者でさえ、それを聞いた時は、憤りに耐たえなかつた。人間の敵に対するほど、人間の怒りを覚える事はない。

これを使えば、四年前にいた牢の中には何たる善人ばかりが集っていたことか。——あ
の中でいちばん強悪無類だといわれていたわしでさえ、道三父子には、どっちもどっちだ
など、堪らない憎悪を感じた。

戦は、その日や次の日ぐらいでは、熾まなかった。

何しろ美濃は大国である。駿河の今川家に次いで兵力財力があつた。醜い骨肉の戦乱
のために、その財力も、その兵力も、燃やし尽してしまわないうちに、天も火を鎮め給わ
ぬかのように、毎晩、赤銅のような空をしていた。

それはいいが、遂に、戦争は近くの関の宿から、この下有知まで飛火して来た。長良川
を溯つて攻めて来た稲葉山の兵は、下有知の民家へ火を放けやがった。意地にも坐つてい
られなくなり、わしは老母を背中へ背負つて、火の粉や銃音の中を、駆け出した。

「もう駄目だ」

森も焼けている。麦も蹴ちらされている。わしは末期の村を見た。火を噴いていない家
はない。

「ちえつ、こんな国主の下に、いてやるものか。そうだ、山越えして、越前へ出よう」
両軍の陣は、ちょうど、火になっている下有知を挟んで戦っているらしく、どっちへ行

つても陣があつた。無数の死骸が捨てられてあつた。

やつと、安曾根^{あそね}の溪谷まで逃げて来た。そこはもうかなり高いので、両軍の形勢が一目で分つた。そして、山城守道三が、全面的に、もう敗北しているのが分つた。

遠い山から、炭焼小屋でもあるように、煙がのぼっていた。それは皆、道三方の与党の城が焼けているのだつた。

「どつちが勝つても、こんな事じゃあ、どつち途^{みち}、長持ちする国じゃあねえ。焼ける焼ける、もつと焼ける」

何の未練もない気がした。だが、背中^{としより}の老母にしてみたらどうだろうか？

ふと、自分の背を、肩ごしに覗いて、

「なあ、おふくろ。俺あこれから、越前へ行こうと思うが、おふくろはどう思う。越前は朝倉家の領分だから、あそこなら穏やかで、新しい魚は食えるし……。嫌かね、どうだね。……ええ、おふくろ。……おやつ？」

わしは仰天した。

肩を揺すぶると、母の首は、わしの肩から力なくぶら下がった。眼をふさいで——唇から血の糸を引いて。

老母^{おふくろ}は流れ弾^{ながだま}にあたつて、いつの間にか死んでいたのだつた。

五

わしは幾日も冷たい空骸^{なきがら}を背負つて歩いた。夜は抱いて山に寝た。

いくら肌寒い山中でも、三日も経つと死臭を放ちはじめたが、それでも母の死骸を捨てきれなかつた。

大日岳^{だいにちだけ}へかかつた。

屍体^{しかたい}の肌は、もう葡萄色^{ぶどういろ}になつていた。わしは、わしの愛執^{あいしゅう}のために、老母^{おふくろ}の

そうした醜い顔をいつまでもこの世に曝^{さら}しておくのを罪深く思った。

清浄な檜^{ひのき}林^{ばやし}を見つけた。わしは老母^{おふくろ}の空骸^{なきがら}を千年苔^{せんねんけ}の下に埋めた。鋏^{くわ}は近くの

小挽小屋^{こびき}から借りて来たものだつた。手から鋏を捨てるとわしは両手をつかえ、親というものへ、生れて初めて真心と形との一つになつて、ほんとの頭を下げ切つた。

「……………」

鳥の音が澄^{とお}んで透^{とお}る。とめどなく涙があふれ出て止まらない。三ツ子のようにわしは鳴^お

咽^{えつ}していた。

——すると誰か後ろで咎^{とが}めた者があつた。わしはあわてて泣き顔のやり場を失い、鍬を拾つて檜林へ逃げ込もうとした。

「土民つ、逃げるには及ばぬ。恐ろしい者ではない。越前へ越える道を問いたいのじゃ。待て、待てつ」

呼び返されて、わしは振向いた。二人の落武者が手を上げている。

落^{おちゆうど}人^{ひと}と見れば、以前はすぐ、稼^{かせ}ぎの鴨^{かも}を見つけたように、兇悪な胸算用を立てなが

ら猫をかぶっていたものだ。

そのわしを見かけて、恐ろしい者ではないと武者がいうのを見れば、わしも今ではよく善良な土民と人目にも見えて来たのであろう。

「あ。……お侍様。何ぞ御用でも」

「されば、道に迷うて、ここまで来たが、越前へ下るには、どう参つたらよいか。越前路^{だいにち}の大日越^{だいにち}えは、どの方角にあたろうか」

「ここがもう、大日道^{みち}でございます」

「では、いつの間にか、大日越えへかかっていたのか。——光^{みつ}春^{はる}、武運はまだ尽きたと

は見えぬぞ」

ニコと笑って、一人は連れの武者を顧みた。

「ここまで参ればもう大丈夫……」と、ふたりは苔こけの上にどかと坐り、手足の傷口を縛り直したり、具足を脱いで、腹巻を締め直したりしていた。

ふたりとも、非常に疲れている容子だし、空腹でもあらうとわしは察して、鍬を返しに行つたついでに、木挽こびき小屋から食物や湯など貰つて来てやると、二人は欣んだが、食物には手をつけず、

「そちは此処の土へ、一体何を埋めたのか」

と、土色の変つている所を指して訊ねた。

わしは包まず仔細をはなした。すると初めて、疑いを解いたらしく、

「左様であつたか」

「不愍ふびんな事をしたのう」

と、食物もたべ、湯も口にして、なおいろいろな事を訊ねた上、わしの人間を見届けて安心したものか、

「実は、われら両名は、斎藤山城守様に随身の者だったが、義龍との一戦に敗れ、これよ

り越前の穴馬^{あなうま}まで、知る辺^しを頼^べつて落ちてゆくところ。——そちも同じ途中と申すし、寄^よる辺^べもない身の上とあれば、幸い、ここよりわしらの供をして参らぬか。落着いた上は、若党として召使^{つか}つて遣わそうが」

わしは、結構なはなしだと思つて、即座にお願いした。そこで二人の御主人は、花やかな鎧具^{よろいぐそく}足^{あし}を着けて歩いていては、人目につくからと、二領の鎧を脱ぎ重ね、それを旗で巻いた上、さらに蓆^{むしろ}ぐるみにして、わしの背へ担^{にな}わせた。

旗には、桔梗^{ききよう}の紋がついていた。

年上の主人は、二十九歳だとかで、眉目^{びもく}秀麗^{ゆうれい}で、智慮^{ちりょ}ぶかい眸^めをしていた。

名は、後で知つたのだが、明智^{あけち}十兵衛光秀^{みつひで}といい、山間の小城ではあるが、きのうまでは、美濃^{みの}明智^{あけち}ノ庄^{のむら}の明智城^{あけち}の主^{ぬし}だつたお方である。

もう一人は。

十兵衛様の従兄弟^{いとこ}にあたり、四ツほどの年下で、斎藤山城守^{さいとう}の老臣^{らうしん}、明智光安の子で、左馬之介^{さまのすけ}光春とおっしゃつた。

世の中というものは、つくづく怖い。その時はまだ、どっちも気がつかずにいたが、やがて越前の穴馬まで、辛苦を共にして落ちて行くうち、ある夜山家の炉辺^{ろへん}ばなしのうちに、

端なくもこの十兵衛光秀とわしとは、初対面でなかったことが明らかになった。

四年前に——あの岐阜の牢へ捕われた動機というのは、わしが馬泥棒に入った時、その邸の食客殿に騎馬で追いかけられ、そのまま奉行所へ突き出されたためだったが——何と、その時の若い食客殿こそ、十兵衛光秀様だったのである。

わしは、十兵衛様の、何事をも見通すような深い眼を仰ぐと、到底かくしていられなかった。

で、ある時。

「実は……」

と、その事から、前身の罪業まで、残らず有態ありていに自白してしまうと、

「そうか。そんな前身もあったのか。ならば修行ひとつで、戦場でも一かどひとに働ける男になれよう。僻ひがまずに、なおなお、自分を磨みがき直す事を心がけたがいい」

と、光秀様のおことばだった。わしは身に過ぎた主人に御縁を持った事を、天地に感謝した。平時なら側へも寄りつかれぬ人の郎党となつたのである。しかもその主人は、人なみすぐ優れた器量と学識をもち落おちゆうど人の境遇でこそあったが、わしらのような卑いやしさなく、何処へ出しても一方いっぽうの大将として恥かしくない人品と骨こつがらをも備えておられた。

開く桔梗ひらきぎよう

一

越前の穴馬あなうまには、六年間ほど、郷土として蟄伏ちつぷくしておられた。その間に光秀様はわしを連れ、諸国を武者修行に歩いては、また、穴馬へ帰っていた。

従兄弟いとこの光春様は、他家を頼って、もうその土地にはお在いでがなかった。六年の牢人暮らしは、随分、貧乏に苦しめられた。しかし、光秀様は、いつも書を読み、大志を養い、少しも貧乏くさくはなかった。

「さすが、氏素姓うじすじようのちがいは争えぬ」

わしは、いつも思った。知らぬ間に、主人自慢になって、

「おれの御主人は、いつまでも、こんな草深い田舎に埋うずもれているお方じゃないぞ」と、大言した。

人もまた、わしの大言を、

「何をいうか」

とは嗤わらわなかった。むしろわしの自慢以上に、称ほめ讃たたえてくれた。世辞でなく、穴馬の町民や土民は皆、光秀様に心服していた。

越前いちじょうだに一乗谷の太守は、人も知る朝倉義景公だった。度々、その一乗谷から、乗物を持つて光秀様を迎えに来た。

鳥甲斐外とりかいげき記だの、岩佐壺岐いさきだのという重臣たちも、度々、浪宅へ遊びにみえた。元より遊びは表面で、雑談の末には必ず、

「義景公に仕えるお心はないか。禄ろくはどのようにも、われらから、お望みのほどを、口添え申すが」

などといわれた。

最初は、断つておられたが、懇請こんせいもだし難く、光秀様も遂に廬ろを出で、朝倉家に随身なさる事になった。

御主人の出世につれて、わしも一乗谷の御城下へ移ってから、侍らしい侍になった。労苦を共にした効かいあつて、

「孫平治。多年貧乏苦勞をさせたが、これからは、そちにも一ひとかどの供や馬ぐらいは持た

せてやるぞ。——だが、人いちばい無学そのほうの其方、よほど修養を心がけぬと、主人のわしが立身してゆく後に従ついて参れぬぞ。追いついて来い。懸命に勉強して」
と、よくおつしやつた。

だが、わしにはとても、御主人の真似はできなかった。

朝倉家へ隨身されてからでも、御主人の勉強ぶりといったら生なまやさしいものではなかった。一、二年のうちに、書物はお部屋を埋め、新しい武器——わけて鉄砲に関して、その製造法から撃ち方、火薬についてまで、どんな学者も兵法家も及ばないほど研究なされた。

「孫平治、寝てもよい。もう寝やすめ」

と、仰つしやつた後でも——夜半よなかにふと窺うかがつてみると、御主人の部屋だけには灯ともがついていた。

いつたい、あんなに書物を読まなければ、人間というものは、一人前になれないものか。偉い武将にはなれないのか。さてさて、修養というものも、大へんなものではある。——と、魯鈍ろどんに生れたわしなどは、御主人の余りな精進に、むしろ胆いがちぢまってしまう。

しかし——

余りに光秀様の聡明な眼や学識のある弁才は、朝倉家の家中では、かえって冷たく見ら

れたらしい。なぜなら、その頃、太守の義景公を始め朝倉家の家中というものは、非常に
紊みだれていた。国主の閨門けいもんが、権勢を持っていた。家中の士は、華美でおべっかで、本願
寺の門徒衆とは、たえず小戦争こぜりあいをやったり、妥協したり、陰謀いんぼうが曝露ばくろされたり——どう
も始末が悪かった。

「長くは留まる国でない」

光秀様は、時折、嘆息した。今さら悔いておられるらしく、楽しまない日が多かった。
折ふしここに、御主人の憂愁ゆうしゅうを開く人があらわれた。

室町將軍家の管領の家すじ、細川兵部大輔藤孝ひょうぶだいふふじたかというお方だった。

二

三好一族の叛乱はんらんに趁おわれて、將軍義昭公よしあきは、諸国を亡命して、逃げあっていた。
若狭わかさの武田義統よしむねを頼たのつて、亡命將軍の一行は、

「いかに京都を奪回とりかえすか」

と、諸国の武將の頼み効たのいある者を、物色していた時なのである。

「朝倉家こそは」

と、お味方と見込んで、細川殿は將軍家の旨を帯び、その交渉に幾度となく、一乗谷の金ヶ崎城へ見えられた。そしてわしの御主人とも、御懇意になった。

義景公は、亡命の將軍家へ、欣んで加勢を承諾されたが、朝倉家の内情は、前にもいったとおりなので、その後將軍家が身を寄せられても、賢明な細川藤孝殿は、すぐ、

「これは頼りにならぬ」

と、察してしまい、とかく去就に迷っている月日がかなり長かった。

その結果、細川殿は、朝倉家の家中のうちから、ただ一人、明智光秀という人物を見出され、頼みがいある者と思われたか、人目忍んで、度々、わしの御主人を邸へ訪ねて来られた。

それがまた、朝倉家譜代ふだいの者の眼には、何か意味ありげに映って、よけい猜疑さいぎな眼で視られた。

「小人という者ほど始末の悪い者はない」

金ヶ崎城からお退がりになる度、御主人の血色には、我慢が抑えられていた。わしは多年、奉公したので、御気質もわかつているが、日頃は女性のようにお優しく、そして事理

明白な頭脳を持つておられるが、非常な癩癰かんぺきが内につつまれていた。学問と修心とで、その天性を、悪いと自覺して抑えているだけに、そうした時のお顔色は、酒に弱い者が悪わる酔よした時のように青かった。

だが、わしが、

「藤孝様がお越しになりました」

と、取次ぐと、そんな折でも、

「おう。渡らせられたか」

と、いちどに愁うれいも払われて、御自身、ずかずかと、式台まで出て、

「ようこそ」

と、別人のように晴々と、お迎えになるのが常だった。

お二人は実に話がよく合うとみえて、時の移るのも忘れている。その話がまた、多方面で該博がいぱくなのに驚かされる。藤孝殿はいつも口癖に、

「どうしてこんな文化の低い地方に、貴方のような都にも稀まれなる知識人がいるのか」
と、よくいわれた。

わけて国学についての話題がよく出た。細川殿は和歌の道に造詣ぞうけいが深かった。美術、

文学、天文、兵学、そして時事を談じ、一転して、食味のはなしや、笛、蹴鞠けまりの事、流行の連歌の評やら——殆ど尽くるを知らなかった。

「時に、……今日は」

と、その日に限つて、細川殿はあまり弾はすまず、声を密ひそめて、何か折入つての相談があるらしかったが、侍坐じざしているわしを憚はばられて、ちよつと、口を閉じた。

すると御主人は、わしへちらと目をくれた。

「仔細ない腹心の者でござりますゆえ、お案じなく」

といった。

では——と安心したように、細川殿は口をひらいて、

「当国の朝倉殿も、あのような態ていでは、天下の覇業はぎようなどという大事の相手には心こころ許もとない。——というて、何処いずこを見まわしても、乱麻らんまの時相、小国は小国なりに、大国は大国なりに、足もとの闘争のみに追われている時代。……抑そもそも、今の武将のうちに、一体、誰を力に、將軍家を頼み参らすべきか。藤孝もともと困こづじ果ててござる。隔意かくいのない御意見もあらば、聞かせて戴きたいものであるが」

というと、光秀様は、膝を正して、

「真実、そのお志ならば、不肖^{ふしよう}光秀が、再び牢人いたして、密か^{ひそ}にお使いいたしてもようござるが」

「して御意中の人とは」

「小国なれど、尾張の織田^{かずさのすけ}上総介信長公。あのお方を除いては、今、大事を語る武將はござりませぬ」

いつの間に、観ていたのだろう。信長公の偉材である事や、尾張の国の地勢と将来性が、やがて大を成すに違いないという事を、光秀様は、あらゆる角度から観て力説なされた。
「ううむ。……成程」

細川殿も、うめきながら、炯々^{けいけい}と眸をかがやかして、終始、熱心に耳を傾けていた。

三

それからの事は、審^{つまび}らかに話せば、余りに長い事になりすぎる。
御主人の開運は、まさしく、信長公にお目にかかった時からだった。
いうまでもなく、義昭將軍の旨^{むね}を含み、細川殿の使いとなつて、岐阜城へ臨んだのが、

御縁であつた。父、道三を討つて、威をほしいままにした斎藤義龍の稲葉山の城も、すでに亡んで岐阜城と名も革まり、そこにはもう信長公が君臨していたのである。

光秀様は、時に、三十九歳であつた。

以来、信長公に仕えて、わしの御主人も、

「今度こそ、働く処を得た」

と、欣ばれ、信長公にも、

「よいやつを見出した」

と、お覚えも殊のほか良いとか、いつも洩れ聞いていた。

一躍、織田家の士隊長したいちようを仰せ付かつたのを見ても、いかに重用されたかが分ろう。

それからの、光秀様の戦歴もまた、輝かしいものであつた。

永禄十年二月には、滝川一益かずますの軍に従ついて、北国を討伐し、上木うえき、持福きまた、木股などの

城を降し。——十一年には、池田勝政の池田城を陥し、十二年には、丹波へ討入っている。

元亀元年げんきとなつては。

若狭わかさへ転戦し、続いて、天正元年には、柴田勝家と合体して、滋賀しがの石山、堅田など、

一向宗の僧軍と戦うなど——殆ど、年ごとの正月にも、かつちゆう甲冑を解いて、とそざけ屠蘇酒を祝つた例はないといつても、過言ではない程だった。

「働く処を得た」

と、おつしやつていた通り、わしの御主人も、実によく職に尽されたが、信長公も実によく光秀様の才能を、やくろう薬籠中のものとして、お使いなされたものと思う。

誰にも疲れは来る——。

また、立身なされば、自然、立身した心にもなる。

ふと、その疲れを、亀山のお城に休めて、今と越し方を顧みれば、ぼうぼう茫々十七年、ひげ髭にはもう白いものの交じる五十五歳の御自身を見出して、夢のようにも思われたであろう。

が、今は。

夢ではない。丹波一国を領して、身は亀山の城に君臨し、位階は従五位下、族をこれとう惟任と改め、ひゆうがのかみ日向守に任官なされて、天下の府、あづち安土奉行衆の一席をも占めておられる。

——まったく、何度も繰返すようだが、昔を思えば、夢のような御出世である。

おまえ見たかや

お城のにわに

今が桔梗きぎようの

さかり頃——

御城下の田や山で、この頃よくきく歌は、光秀様の善政を謳歌おうかし、明智家の開運ことほを祝うぐ声だった。実際、領内の御政治は、非難のしようもないほど、行届みいて、平和に盈みちていた。

けれど、光秀様の顔いろには、お疲れが濃ふさくなった。淋しい山陰ひともとききようの一本桔梗きぎようのように、いつも愁うれいに鬱ふさいでいた。

——何事があつたのだろうか？

家臣は誰も思つた。

しかし、誰も深くは察しなかつた。

越前穴馬あなうまごい在まの御牢人時代から、お側を離れた事のないわしに至るまでが、不覚にも御主人のお胸のうちを、最後の最後に来るまで知らなかつた。——いや時には、不審と思われぬ事もないではなかつたが、決して感情を素すで現わさない御気質ではあり、家臣どもには、お胸に炎をつつんでも、そういう時ほど、優しくなされる方なので、まったく、窺うかがい知る術すべもなかつたのである。

びつちゆうこう
備中行

一

忘れもしない。それは天正十年の五月の末だった。たしか二十七日の晩かと覚えている。
御主人には、愛宕山あたごの西坊へ登られ、その夜、威徳院で連歌の会を催された。

光秀様の歌道は、細川藤孝（幽斎ゆうさい）殿と、御姻戚ごいんせきの間がらとなつてからは、なおさら、研鑽けんさんの深いものがあり、かつて、滋賀の唐崎からさきに松を植えられて、その折、

われならで誰かは植えん

ひとつ松

心してふけ

滋賀の浦かぜ

と詠じた歌などは、公卿くけたちの間にも秀歌と伝えられて、「やさしき武士もののふ」といいいはや囃はやされたものだつた。

御主人は、「やさしき武士」であつたろうか。わしは後になつて考えても、光秀様の心ほど、今以て解らないものはない。

一見澄みきつた深い淵のような気質と思う。いや深いか浅いかすら覗かせない所があつた。蒼黒い深淵のなかには、どんなぬしが棲んでゐるか、凡慮には測り知ることができなかった。

愛宕山の連歌の会では、紹巴の次韻をうけて、

時は今天が下知る五月哉

と、詠まれたそうで、後では皆が、すでにその時の会には、光秀様の胸の深淵に、恐ろしいぬしが叛逆の口を怒らせていたのじやと、是々非々、噂し合つたが、それもこれも、及ばぬ後の事でしかない。

それから、亀山城へお歸りになつた六月朔日の晩、御主人には、遽にお従兄弟の左馬之介光春様を、お召になつた。

お会いになる前に、御主人には、いつになく硬ばつた顔いろで、

「孫平治。——寄れ、近う」

と、わしを側へ引かれ、

「光春とはなしがある。その間、何人も寄せてはならぬぞ。よう見張っておれ」
わしは意外に思った。

例のない事だ。日常、礼儀作法のやかましいお方が、いかにお従兄弟の仲とはいえ、蚊帳の中にはいつて、しきりと、密談遊ばしているのだった。
そのくせ。

二、三度、激越なるお声がもれた。光春様のお声も、感情にふるえておいでになった。
わしは、辺りへ近づく人間を見張るより、御帳の裡のおはなしに全神経を奪られてしまった。わしの足は、がたがた顫え、唇の色もなかったろうと思われる。

「出陣。出陣っ」

「先鋒。——荷駄隊、用意」

星の白い真夜半だった。

組々の士隊長は、お城の土坡に立って、法螺のような声で怒鳴った。

が——それには、誰も驚きあわてるはずもない。既に夜の出陣は、知れ渡っている事である。

昨年来、信長公の命をうけて、御幕下の将校、羽柴筑前守秀吉は、中国に攻め入って、

この春以来、備中^{びうちゅう}高松城の清水宗治^{むねはる}の頑強な抵抗に、いとめられ、遠征の軍馬は、攻めあぐねている態^{てい}であつた。

その秀吉から信長へ、願わくば君公の本營を進めて、御威光の督選^{とくせん}あらんことを、要請していた。

わしの御主人は、その先鋒として、中国へ出陣を申しつかつていたので既に、行軍の準備は一切手落ちなくできていた。

城門が開かれると、真夜半^{まよなか}の亀山の町々の上へ、出陣の貝が、長い息をひいて鳴って行った。

辻々には、赤々と、篝火^{かがりび}が燃えて、国主の出陣を見送る領民が、眠りもせず土下座していた。

蜿蜒^{えんえん}と、軍馬は、東へ向つて流れて行つた。

「……？」

お留守居組のわしは、その長い列の行く手を、お城の土坡^{どは}から見送っていた。とめどなく流れる涙も拭わず見送っていた。

「ああ、厭^{いや}な空だ……。怖ろしい雲の形相^{ぎようそう}だ。明日^{あす}のこの世はどうなる事やら？」

思わず、空を仰いで、わしは嘆息した。あしたの天変地異を今夜の今知っている者は、あの出陣列に従って行つた御家来衆も数多あまたながら、わしひとりしかなかったのである。

——怖ろしくて、胸が動悸どつきして、わしは、どうしても、寝つかれなかった。

二

なぜお止めしなかったか。死を賭としてまでも、なぜ諫言かんげんしなかったか。

臆病者、不忠者。

わしは、わしを責めて、怖ろしさと苦しみと、二重の悩みに、輾轉てんてんと悶もだえた。寢床についてから、わずか半刻はんときばかりが、十年の苦悶にも思われて長かった。

「そうだ。今からでも」

わしは、がばと、寝具を蹴うつて、厩うまやから馬を曳き出した。

城門の番士には、

「殿様が御持薬ごじやくの咳薬せきぐすりを、お忘れになったから、追いかけて、お渡ししてくる」と、作り事をいい、駒に鞭むちをあてて、出陣の列を追って行つた。

その晩のわしは、まったく捨身すてみだった。田も畑も街道も見えなかった。ただ真つ暗な五さ月つき闇やみの雲きの断れ目めに、ぴかぴかと大きく光る星だけが、何かの凶兆のように眼に映った。桂かつらがわ川がわの流れを越えると、京はもう間近にそこらの山上から指さされる。幸いにも、わしはそこで御主人に追いついた。

軍馬は、山の頂で、一息ついていたのである。しかし、その馬の嘶いななきも将士の顔も、士氣も、亀山の城を出た時とはちがつて、一度に騒さわ々ざわ殺氣立っていた。

「お忘れ物を届けに参りました。お目通りを願いたいです」

いつもなら、わしの顔だけで、取次を待たずとも許されるのが、味方のわしまでを、将士の血ばしった眼は、疑わしげにぎらぎら見つめて、

「成らぬ」とか、

「しばらく待て——」とか、さんさん立騒あはいだ挙句あげく、やっと、御主人の床几しょうぎの前まで通るのを許された。

光秀様のまわりには、同族の左馬之介さまのすけ光春様を始め、溝尾茂朝みぞおしげとも、御牧兼顕みまきかねあき、斎藤内く蔵助らのすけ、村越三十郎、天野源右衛門、そのほか老臣旗本たちが、甲かつちゅう冑うに身をかため、爛らんらん々と恐い眼をそろえて、楯たてを並べたように、そこを囲んでいた。

「孫平治か。何で参った。——忘れ物とてないはずだが」

わしは、御主人の前へは出たが、しばらく、口がきけなかった。

息も切れていたが、口に出すのも、恐ろしい事だったのである。

「たわけめが。何を顛ふえておる。はやく申せつ。もはや、夜明けが間近い」

びーんと、耳を刺すような声に、焦いら々した癩かん癩しゃくがこもっていた。わしはかえって、

御主人のその烈しいものに引出されて、

「お、おそれながら、……暫時、暫時、お人ばらいの程を」

いうと、御主人は、くわつと、眈まなじりを裂くようなお顔で、

「何、人払いと。そちは、忘れ物を届けに来たのではないな！」

「は……はい」

「おのれ。……人払いなどして、何をこの光秀に申そうというのか。いえ。ぬかしおれ。人払いには及ばん」

「死、死を賭して、参ってござりまする。……孫平治が、生涯のお願いを」

「生涯の願いだと。ふふム……さてはおのれ、宵に、光春との密談を、ぬすみ聞きしおつたの」

御主人はいつて、体じゆうに、かつて、人に見せた事もない昂^{たか}ぶりを顫^{ふる}わせながら、京の方を指さしていわれた。

「わが兵馬は、備中へは向わぬのだ。わが敵は、本能寺にある。——そう光秀は今、ここです全軍へ宣言したところだ。人ばらいなど無用。申したい儀があらば大声でいえつ」

三

たとえ、御主君に対してであろうと、わしは正しい事をいうのだ。お諫^{いさ}めするのだ。天に代つて声を放つのだ。

そういう氣持が、途端に、わしの声を胸から衝^つき出した。夢中で申し上げた。

「あなた様には、天魔が魅^み入^いったのでござりますか。信長公へ対していかような御憤怒、御不満、また忍び難いものがござりましょうと、虚^{きよ}を衝^ついて御主君を討ち奉るなどとは、天人共にゆるさぬ大逆——」

いいかけると、御主人には、はつたとわしを睨みつけて、
「孫平治。ぬかすなッ」

「いや申します。申さいでは……」

「黙れっ。黙れっ」

わしは、物狂いとも見えよう様な血相して、

「聞かれませい！ 孫平治の口をかりて、天があなた様へ申すのでござりますぞつ。あなたは、お若い時から、万巻の書を読んだ！ じゃが、あの書のたった一行にでも、主君を弑逆してもよいと申す文字がござりましたか。またあなた様は、生来の御聡明じゃ。その理智の見分けに細やかで鋭いお眼は、他人の些細な非行たりとも、決して見逃しはなく、眉をひそめられる方じや。時勢を眺めてもその通り、常に御批判の正しいお方じや。

——それが、それが、御自身……」

声つまらせると、

「黙らぬか、下郎っ」

無法な声を出されて、御主君には、床几を立ち、やにわにわしを足蹴にしかけたゆえ、わしはお手討と、はや観念の眼を閉じながら、具足の脚元へお縋り申して、

「黙りませぬ。主君を害し、人道に反いた武士が、古今を通じて、一人たりとも身を無事に終っておりましょうか。近くは、あなたは、あなた様も、その眼にまざまざと見ておいでなされま

しよう。斎藤山城守殿の末期はどうでございましたか。稲葉山の義龍殿は、何たる浅ましい滅亡を曝さらした事でござりましょうぞ。——現にあなた様御自身も、その業火に取巻かれ、その地獄から遁のがれて、正道の御修養をなされたればこそ、今日の御身分も築き得たのではございませぬか。——人間を観る眼、時勢を観る眼を、人すぐれてお持ちのあなた様が、いかに逆上されているとは申せ、御自身を観る眼を、そこまで、盲目におなりなされてしまったとは、この孫平治には信じられませぬ、万巻の書も、かくては、あなたに取つて、何のお役にも立たぬものでした。いえ、かえつて、智恵ぶかい大悪人を作つたようなものです。孫平治如きは、今なお、一冊の聖賢せいけんの書もよう読みませぬが、それでも、この御国の上においては、忠孝二つを踏み外しては、天道も人道もない事ぐらいは、よう弁わきまえておりまする」

「うるさい。うるさいつ。下司げすめが、まだ吠ほえおるか。……ええ、時遅れては大事を逸いつす。源右衛門、こやつを、引離せ」

お旗本の天野源右衛門は、わしの襟がみを掴んで叩きつけ、
「大事を知つた奴、血祭りに」
と、槍を持直した。

が——御主人は、

「ア。待て」

と叫ばれたようだった。けれど源右衛門の槍は、気早く、わしの体突き刺していた。わしはひとついいながら蹴つ立った。その弾^{はじ}みと、源右衛門の槍の力に撥^はねられて、わしの体は、後ろの崖へ勢いよく^{すべ}にり込んだ。

四

わしはすぐ気がついた。——と思っていたが、事實は、一刻^{いっとき}以上も、崖の途中に、仮死の姿でぶら下がっていたものであろう。

槍^{ふかも}は、深^{ふか}股^{もも}の辺を、突き貫^ぬいていた。ひどく出血はしたが、生命^{いのち}は取りとめた。痛みなどは、少しも覚えなかった。

お床^{しょうぎ}凡^{さんらん}のあつた以前の頂まで、わしは懸命に這い上がって来た。——だがそこには暗い木々が山^{さんらん}巒^{うそぶ}に嘯^{うそぶ}いているだけだった。

「……う、わっ？」

わしは四山の眠りを驚かすような大声を突然揚げて、無意識に両手を宙へ振廻した。

どんなに驚いても、^な哭いても、及びつかないものを見た。まさに、京都の空である。ぼ
うと一面に真ッ赤なのだ。

赤い夜霧の中に、さらに一^{ひと}際^{ときわ}赤く、ちらちらと、屋根の波から火を吐いている箇所が
ある――

「本能寺だ！」

わしは、恐ろしさに、髪の手が逆立った。

人間の世の地獄変！

わしの老^{おふくろ}母も、あの火に焼かれたのだ。わしの前身も、あの黒煙から道を踏み迷った
のだ。

非を悔いてから既に二十余年。わしが再びそんな魔道に落ちぬのも、養うて下さる御主
人のお底^{かげ}と常に思っていたら――その才^{さい}謀^{ぼう}学識の人いちばい優れている御主人が、地獄
の火^ひ放^{はな}けをなされようとは。いうも恐ろしい反逆の狂兵を駆り立てなさろうとは。

ぞつと、身^み慄^{ふる}いを覚えた時、わしは一^{いっ}瞬^{とき}に世の中が厭^{いや}になった。所詮、この世という
ものは、学識ある者も、教養のない者も、食える者も、食えない者も、一様に皆つづまる

ところ餓鬼^{がき}の寄合いか。外道悪鬼の遊び場か。ふと、そんな気がして、死のうと思った。わしは坐りこんで、脇差の柄に、手までかけた。

……すると。その時ふと。

わしの心が、死に向って、しんと冷たく澄みきったせいかな、ふしぎな憶い出が頭にのぼって来た。

二十余年前の——稲葉山の牢内に蠢^{うごめ}いていた自分の姿だった。蜘蛛^{くも}六だの何だのの影だった。またその中に交じっていた猿めいた顔をした針売りの小男だった。

あの時も、死を考えた。

あの牢も、今のこの山の頂のように、真つ暗だった。

そんな暗合が、ふと、遠い記憶をわしに呼び起させたのであろうか。わしは、

「ああ、その時の猿殿にも、ついあれ以来会う折もなく過ぎて来てしまった……」

と、呟いた。猿殿は、いつも陽気で明るかった。猿殿の体からは、常に陽気が発しているように見えた。太陽とか、天道とか、よくいった。知らず知らず暗闇^{くらやみ}の人間にも希望を抱かせた。

「そ！……そうだ……」

わしは、猿殿にお目にかかる日が、その天道のお導きで、今こそ、到来したのだ——と、
刹那^{せつな}に考えた。

そう感じると、わしの前に、あの牢獄の切窓から、闇の床^{ゆか}へ、一尺ほど映した太陽のよう——救いの光がくわつと胸^{よみがえ}へ甦^{よみがえ}つて来た。

わしは、血のとまらない深股の槍傷の穴へ、土を詰めこんだ。そしてぎりぎり布^{ぬの}で縛りつけ、そこらの生木を切つて杖とした。

よろめきながら、わしは歩き出した。光秀様は、丹波境^{やかい}のこの峠を東に向つて、本能寺に殺到したが、わしは西へ降^{くだ}つて備中路へ指して行つたのである。

空はまもなく薄^{うす}浅^あ黄^ぎに明けて来たが、団々たる雲のちぎれ間を、赤い煙が這い、太陽は鉛のように黒かった。

道を急ぐわしの後には、洛中洛外の騒動が、目に見えるようなこちがした。地獄の物音が耳についてならなかった。

さみだれ陣

一

二十余年のあいだ、わしは闇の中で別れた猿殿の事を、一日たりと、忘れた事はない。だが、主人持ちの身には、私の暇は一日もなかった。御主人が貧困時代は貧困に追われて。御主人が出世なされば、わしの勤めも共に重くなって。

が、心ひそかに、猿殿との再会は心がけていたので、その後、猿殿が何人であるか、どう暮しているかは、会わなくとも、よく知っていた。

——あの成り上がり者が。根は、中村の土百姓、足輕の果て木下弥右衛門の子ではないか。

——それが今では、羽柴筑前守の、秀吉のと。長浜の城主から、また、姫路城へおさまつて。とか。

——運の強い猿ではある。いかに才^{さい}長^{いた}けた、戦^{いくさ}上手の男とはいえ。とか。

——ちと、君^{くん}寵^{ちよう}も過ぎよう。というと、あいつに逆^{さか}らった者、なぜか、みな亡びておる。何しても、うるさい猿面。とか。

こうした類の噂は、近ごろ、いや数年も前から、年ごとによく聞くことで、光秀様にお

かれても何かにつけて、

(猿めが)

と、いう事は、よく口に出されたのを、わしも側で聞いていた。

だが最初のほどは、よもや近ごろ隠れもない織田家の御幕下の猿面殿が遠い以前、稲葉山の牢で、わしの見知っているあの猿殿と一つ人間であろうなどは——どうしても考えられなかった。

しかしその疑いは、過去の彼と、現在の彼との、形や身分を較べるからで、素の人間だけとして考えてみれば、光秀様にしても、穴馬在の貧困時代に誰が今日あることを想像もしよう。

猿殿の御素姓や、幼名なども、あの折、おぼろに聞き覚えていたわしは、近ごろ、惑星視されている羽柴筑前守殿こそ、わしの知っているお方に紛れない——とやがて知って、懐かしや、一度は会うて沁々しみじみと、昔語りをなどと思つてみたが、先の地位も地位、こちらとの関係も関係、それと常に、戦陣から戦陣へ、席の温まる間もないお方——主人持ちのわしの身にも暇はないし——つい思いつつ幾年いくとせかを過ぎて来たわけだった。

けれど、今こそ、そんな小さな私事わたくしごとでなく、天下の大事を齎もたらして、猿殿にお会いで

きる日に行き着いた。

いや、お会いする事を楽しんで、それも私事になる。わしは悲壮な考えと、大乘的な決意とを固めて、丹波境から東した御主人とは反対に、西へさして、道を急いでいるのである。

微塵^{みじん}、この間に、私心をうごかしてはいない。神仏御照覧あれ。わしは御主人を裏切るのでもない、身一つの落着きを見つけに行くのでもない。ただ、平凡な人道を真つ直ぐに歩んで行こうとするだけだ。この国の闇が二年、三年と続くものを、一日もはやく、修羅^{しゅら}から救い、同時に御主人の悪逆無道の狂乱をも、苦患^{くげん}の底からお助けしたい——と念じるしか考えていないのである。

二

さて。

わしは六月朔^{ついたち}日の未明から歩き続け、夜の目も眠らず、六月三日の夕刻には猿殿の御陣所——備中高松城の寄手^{よせて}の戦場間近くたどり着いていた。

「うさんな奴。どこへ行く」

「城方の使いであらうが」

わしは、八幡山やわたやまの木戸で、寄手の歩哨ほしやうにすぐ捕えられた。元より、本望の事と、驚きもせず、わしの両腕を捻ねじ上げた兵たちへ、声高に訴えた。

「うさんな者でございませぬ。大事をお告げ申すために、丹波表より夜の目も眠らずに来た者でござる。逐ちくいち一は、筑前様へ直じき々でなければ申されませぬ。他ほかでは寸言も吐きませぬ。何とぞ、大将のおん前へ、引つ立てて戴きとうござる。縄付でなりと、お恨みは仕りませぬ」

わしはそういつて、自分の両手を後ろへ廻し、神妙の態ていをまず見せた。

この辺りは、浮田うきたひでいえ秀家様の陣地だった。急に伝令が駈けた様子。間もなくわしの身柄は、七名の槍圍いに監視され、羽柴秀長殿の陣所を通つて、石井山の御本陣まで連れて行かれた。

風のたよりに、高松陣の難攻は、丹波表でも聞いていたが、わしは途々みちみちこの攻略の
仰ぎょうさん山かえるはなな備え立てに吃驚びつくりした。

蛙ヶ鼻から石井山の中腹の御本陣へと登ってゆくと、いやでも、大規模な戦場の全地域
が目の下に展ひらかれてくる。

それが皆、いちめんの泥湖どろうみではあるまいか。

わしも旅の間、降り通されて来たが、ここも梅雨つゆの長雨で足守川、長野川などの河川は
氾濫はんらんするばかりであった。それを、この石井山の南端から、大きな円形を描いたように、
長さ二十八町二十間という堤どてを築いて囲み、川水を落して、大きな泥湖どろうみを作りあげてい
るのである。その湖の真ん中に、ぽちと、沈みかけている楼船ろうせんのような城が浮いていた。
敵の高松城はそれなのである。毛利家の被官ひかん、清水長左衛門宗治むねはるが、わずか五千の士卒
や農兵と共に、餓死がししてもと、死守している敵城なのであった。

猿殿の総軍は、約三万とか。

その大軍が、四月中旬ごろから、田圃たんぼのなかの小城一つへ、攻めかかって、二回の総攻
撃も功を奏せず、殆ど、手を焼いてしまったため——最後の一策として、水攻めを計画し
たものなのである。

が、落ちないのだ。

城にはもう、一つぶの米、飲む水すらも、ないと知れきっている。

それでも、泥湖どろうみの中の浮城うきしろは、寄手が近づけば、わっと反撥はんぱつする。死にもの狂いになって戦う。物を食っている兵よりも強いのだ。

わしも、後で聞いた事だが――

思慮の深い寄手の大将猿殿には、力づくでこの小城を落そうとすれば、敵に何倍する死傷を、寄手も出すに違いないと見たとの事で、その為こういう策を用いたものらしい。

毛利家には、元就もとなりの家訓があつた。城を築く時、土台石に、その家訓を刻ませた。

百万一心。

の四文字だと聞いている。

猿殿は、それを知っていたのだろう。水攻めと、糧道たを断つ、この二つで攻めた。けれど城兵の、五千一心、は六月にはいつても、陥落しなかった。

表面、包囲形を作つて、三万の大軍は、ひしひしと詰めていたが、寄手にも、隠しきれない焦躁しょうそうがあつた。――それは、毛利方の吉川きつかわ元春、小早川こばやかわ隆景の四万の兵が、援軍として、すぐ対岸の山岳までもう来て対陣しているからである。

しかし、その援軍も、この広汎な泥水をながめては、手も出せなかった。——そして刻々と、実に刻々のうちに、城兵五千の餓死は迫っていたのだった。

はなしが前後したが、わしが石井山御本陣へ曳かれた黄昏は、そういう際どい戦局の危機であつた。心なしか、暮れかけている泥湖の水の光も、孤城の影も、何となく寂として、雨の霽れ間を身に迫る湿っぽい風が蕭々と吹き渡っていた。

持宝院というお寺に着いた。

御陣所のすぐ下だ。

「坐れっ」

という声を浴びて、わしは本堂の階段の真ん前の大地へ坐っていた。

濡れた陣幕が、本堂の蔀を繞っていた。夕風の来るたび、大きな桐の紋がゆらゆらと動いて、そこらの桜若葉から、青光りする毛虫だの雫が、廻廊へも、わしの背へも、降りかかった。

程なく——。

手燭の光が映した。その光も、風にまたたいて、ひどく揺れうごく。七名ほどのお旗本が、廻廊の杉戸からずかずか来て、わしの頭からじつと見た。黙って、両側に控える。

その中央に、黒塗くろぬりの床几しょうぎが置かれた。

四

……ああ。やつぱりこの人だ！

わしは、正面の床几に腰かけた四十四、五歳かと思われる大将の顔を仰いで、途端に、胸のうちに叫んだ。

猿殿は、細い目から、キラとわしを見て、

「丹波表の者か」

と、いった。

「はっ」

喉にからんで、声もよく出なかった。

猿殿は、つづいて、

「何用？」

と、訊ねた。

わしが、お人払いをというと、無造作に顎^{あご}を左右へうごかした。具足や太刀の響きが、たちまち、消えて行つた。

「誰もいない。用をいえ」

「急……急の大変を……お知らせに駆けつけました」

「そちは、誰の家来だ」

「明智殿の側近う仕えて来た者でござります」

「名は……？」

「^{まさきまごへいじ}榎木孫平治と申しまする」

「……？」

わしも、うかといったが、まさか猿殿におかれても、二十余年前にたった一度聞いた獄人の名などを、記憶しておられるはずはなかうと思っていた。

と——猿殿は、手の軍扇^{ぐんせん}を、少しあげて、わしの顔をさしまねき、

「上がれ」

「は……？」

「階段を上がつて来い。ゆるす。もそつと側へ来い」

わしが、恟々^{おどおど}と、お脚元^{あしもと}間近まで、はい上がってゆくと、びしやりと、猿殿はわしの背中を鉄扇で一つ叩いていわれた。

「……牢頭^{ろうがしら}」

「えっ」

「なぜもつと早く訪ねて来なかったのだ」

「……あッ。で、では手前の事をまだ、お覚えで……」

「あんな事は、生涯にも何度とはない。覚えておる。そしてその折、一度はきつと会うと
いったそちが——生れ変つて出たか、死んだか——気にかけておった」

「か、かたじけのうござりまするっ」

わしは、廻廊へ額^{ぬかず}いて、咽^{むせ}び泣いてしまった。

「その後、明智殿へ隨身して来たか」

「はい……」

「人間になつてよかつたな」

「御恩……一日も忘れた事はござりませぬが」

「それだけで満足」

「遂に、今日という機が参りました」

「いつかは、会うものだな。宿縁というものじやろ。めでたい」

「――が、今日は、私事で駆けつけたものではございませぬ。御主人の明智殿事、いかなる天魔に魅入られましたか、先ごろ、信長公より中国へ御出陣の仰せをうけ、六月朔日の夜半、丹波境まで勢揃いして御発向なされましたところ、途中、遽に号令を変えられて、勿体なくも、本能寺に御宿泊中の……」

「ア。これ」

軍扇の骨が、冷やりと、わしの頬を抑えた。

「孫平治」

「……は、はいっ」

必死の訴えを、途中で折られたので、わしの呼吸は肋骨のうちで、出所を失ったように喘ぎ廻った。

「そちは、それをいうな。いつてはならん」

「……では、明智殿の叛逆を、もう御存知でござりますか」

「たった今、京の長谷川宗仁の急使をうけ、仔細、聞いたばかりじや。……不愍ながら、

使いの男は、雪隠^{せつちん}で刺し殺した。敵へ洩れてはならぬからだ」

「……………」

わしは、そうあるはずと思いながらも、何か、張りつめて来た一心が崩れて、茫然となった。

「牢頭。——として置こう。よう訪ねてくれた。そちの性^{しょう}骨^{ぼね}は、秀吉よく知っておる。雪隠へ連れ込んで殺すにもあたるまい。けれど、ここはもう帰れぬぞ。——京都と中国筋のあいだは、何人^{なんびと}も通行さすなど、たった今手配をいいつけたばかりじゃ。……陣中なれど、遊んでゆけ」

返事をする間もない。

猿殿は、廻廊の彼方へ向い、

「おいよ、誰か来い」

と、呼んだ。

お旗本の衆が来てすぐひざまずいた。猿殿はわしの肩を、また、軍扇で気軽に叩いて、
こういわれた。

「剽^{ひょう}げた男じやろ。こんなところへ訪ねて来おった。これはわたしと同じ村の生れでな、

古馴染の男じや。どこぞへ置いて、^{いたわ}劬^{たわ}ってやってくれ」

湖心の扇

一

秘密を知っているということは恐い。その秘密が大きいほど恐ろしさも大きい。

戦場は、遮^{しやだん}断^{だん}されている。その中で、敵も味方もまったく知らないことを、わし独りが知っているかと思うと、堪らない恐ろしさに時々襲われた。

わしより一足前に、飛報を持って京都から来たという密使は、それを知っているばかりに、役目を済ますとすぐ、雪隠で刺殺されたというではないか。

が、猿殿は、昔の誼^{よし}みを思つてか、わしの根性を知ってくれてか、わしを殺さずに遊んでおれという。

それだけに、わしは身の恐ろしさに^{わなな}顫^{わな}く。

わしは、持宝院の一室に、ぺたつと、坐つたきりでいた。決して勝手に立たなかった。

小用へ行くにも、次の間へ断つて行つた。次の間には、片桐助作という若い侍が、わしの接待としてついていた。

現に、助作殿が、

「お酒など、いかがですか」

と、聞いてくれたが、

「滅相めっそうもない」

と、わしは辞退した。

朝になると、

「この寺の庭は、なかなか宜よろしゅうござる。御自由に御見物なされ」

と、いったが、もちろん、立つ気がなかった。

庭先を、武者が通れば、わしは眼をつぶつた。助作殿のほか、誰に何をいわれても、決して口はきくまいとまで、慎つつしんでいた。

めずらしく青空が見えた。

陽が照ると、急に夏を覚える。若葉の隙間から、赤く濁った泥湖どろうみが見晴らされた。

城が見える。水に囲まれた悲壮な城は、ここから眺めると実に小さい。五千の人間が立た

籠てこもっていらるだろうかと疑えるほど、小さなものだった。

凄すさまじい濁流の渦が、その小城を呑まんず勢いで大きな輪を描いている。きのうきょうの夕方から較べても、水は一尺も減へつてはいないらしい。いや刻々増しているのではあるまいか。石垣も見えぬ。外曲輪そとぐるわの塀の腰まで浸つかっている。あの分では、おそらく城内も池だろうと思いやられる。

「あの中には生きている人間がいる。——五千人もいる？」
ふしぎな気がした。

何で生きていらるのかとふしぎに打たれるのである。

まったく糧道りょうどうを断たれてからもう三十日以上にもなるという。それなのに、沈みかけている水城の上には、生氣みなぎが漲みなぎっているのだ。そこに少しの危あやなげな悲鳴もない。

百万一心。

わしは毛利家の家訓を思い出して、その力だと領いた。湖中の城は、そのことばを思う時、荒海いわおの巖いわのように見えた。

「だが……どうなさるだろう」

わしに取つても、その城が、容易におちそうもないことは、少なからず、不安だった。なぜならば、この城が陥^おちない限り、羽柴秀吉以下の軍勢は、退きも進みもならないからだ。

その間に、都にあつては、叛逆者の一夜將軍、これとうひゅうがのかみ惟任日向守が、地盤をかため、この世に、あるべからざる世の中を創^{つく}り出してしまふかも知れない。

また、当然考えられることは、光秀方から密使を派して、毛利方と盟約をむすび、秀吉の遠征軍を、東西から挟撃してしまうという戦法もある。

いずれにしろ、長途の戦い出先に、突然、主君の信長公を失つた三万の秀吉軍は、あの水中の小城以上、今は危ない岐路^{きろ}にある。——しかも京の大変が、吉川^{きつかわ}、小早川の陣へ、ちらとでも聞えたが最後、山つなみの押すように、毛利方は勢いを得て、こちらの浮足を衝^ついて来ることも、目に見えている。

「……どうなさるだろう。猿殿は？」

すべては、猿殿の胸三寸にかかつていることだが、わしもそう案じないではいられないな

った。

夜来、石井山の御本陣では、別だんの変りもなかった。遽に、にわか兵が動くでもなく、動揺の氣ぶりなど、微塵も窺みじんうかがわれない。

しかし早朝にどこかへ、使者らしい騎馬武者が出て行つた。

また、安国寺の僧、惠瓊えけいという者が、午ひるまえだけで、二度も御本陣を訪れた。

夕刻にも、また見えた。

その最後の訪問には、何かの都合で、御本陣が使用されず、惠瓊殿には持宝院の客殿に通されて、秀吉殿以下の者と会見されたので、わしは計らずも、壁ごしに薄々様子を知ることができた。

果然。

石井山の御本陣では、その日、たった一日のうちに、恐ろしく迅い、そして強引な、外交的機略を活潑わはくにしていたものであつた。

惠瓊は、講和の使者だつた。

それより前に、毛利方から和睦の使いに立てられて、

——中国五カ国の讓渡。

——高松城の包囲解除。

——城将清水宗治^{むねはる}の助命。

を条件として交渉に来ていたものだったが、猿殿には、すでに、信長公へ援軍の申し入れをしてあった折なので、

「和議をいたそう。しかし中国五カ国を譲渡すること。城将清水宗治の首差し出すこと。人質^{ひとじち}を送ること。この三カ条は、譲歩するわけにまいらぬ」

と、突っ放しておられたものである。

が、今朝の急使は、それきり見えない惠瓊殿^{えけい}を、石井山から迎えにやったものらしい。

その際、惠瓊殿に対して、猿殿がどんな利をくらわせたか、どう別な意味に、彼を抱きこんだかは知れないが、とにかく惠瓊殿は、

「飢餓^{きが}に迫る城内五千の生命を救えることなら、僧として、身命を賭^としても、和議のお仲立ち仕りましょう」

と敵の吉川、小早川の陣と、石井山の御本陣との間を。——また、城方の方へも、数回往復して、折衝^{せつしょう}に努め、日も暮れごろに迫って、ようやく、和議の調印という運びにまで、漕^こぎつけたのであった。

結果は、双方の互譲^{ごじょう}となつて、

一 中国五カ国の譲渡。

一 城将、清水長左衛門宗治の自決。

の二箇条で、解決を見たのだつた。

調印が済む。

恵瓊を始め、使者たちがぞろぞろ帰る。その氣配をわしは壁^かごしにほほ覺^{さと}つて、初めてほつとした。同時に、猿殿が今日あることのふしぎが、苦もなく解けた。

夜が明ける――

翌四日の朝、巳^みの刻^{こく}には、もう城将の清水宗治は、舟を湖心へ出して、敵味方の見まもる中で、城兵五千の生命になり代つて、見事な自刃を遂げていた。

三

わしはこの眼で、その朝の有様を、持宝院の一室から、目撃していた。前代未聞な割腹^{かつぷく}である。

また、明智殿の叛逆で、出牢以来、信じていた現世への考えを、いちどに覆され、暗澹と世を見失って、

（この世は鬼修羅の住み場か）

と、呪い、何人をも信じられなくなった心へ、再び、

（否とよ。牢獄の闇にも、陽は映したではないか。正大な天道の下には、この世ほど潔く
気高い所はなく、人間程崇厳善美なものはないのだ）

という信念を、固く持ち直させてくれたことでもあるので、余事ながら、その朝の模様
をすこし記しておこう。

元々、清水長左衛門宗治殿という武士は、骨まで香ばしいお人だったに違いない。こ
んどの講和に際しても、

「主家毛利家の御安泰を。城内五千の部下の生命が、身一つに代えられて助かるものなら
ば」

と、冷ややかに、敵方の条件を受け容れられたものだという。

三十余日の籠城の間に、城主を始め、将士は皆、木の根や葉まで食べていた。——しか
しその朝は、城内隈なく、掃除をさせ、自身は静かに天主に上り、衣服を正し、髪をなで、

それが終ると、氣長に毛拔で髯を抜いていたそうである。

時刻が来ると、兄の月清入道やら軍師の末近左衛門などに送られ、水に浸った城門の
際から、小舟へ乗り移る――。その際、家臣ふたりまで、

（御先途を）

と、刺し交えて殉死したとある。

舟は、静かに棹さして、湖心へすすんで来た。――と、赤い小旗を舳に立てた一艘が、
秀吉殿の御陣からも漕ぎ出した。

それには、堀尾茂助吉晴どのが、検視として、乗って行かれた。

（秀吉公よりの御贈り物でござる）

と、検視の舟からは、一荷の酒が、移された。

宗治は、慇懃に、

（御芳志。心ゆくまで、戴くでござろう）

と、侍臣とともに、悠々、杯を交わしていたが、やがて、舟中に立ち上がって、
（よい心地になり申してござる。さらば、この世の名残に、一さし舞うて――）
と、自身、朗々と謡いながら、誓願寺の曲を、舞い終った。

石井山の御本陣を始め、敵も味方も、一瞬、小波も立たぬほどひそまり返って、泥水の大湖の中に、閃—閃—と舞いうごく波の扇を見まもっていたのである。

そのお人の姿が、やがて、小舟のうちに坐つて、がくと、俯つ伏して見えたかと思うと、
「ああ——」

という嘆息が、敵の山からも、味方の山からも、思わず揚がつて、湖の水までが、どうと岸边にうごいて来た。

わしも、その一瞬ばかりは、後々まで、ひとみに深く焦きつけられて忘れることができなかった。

が——刻々にも、大きく動いている時の相は、わしのような者の詠嘆のために、いつまでも、同じ光景を呈してはおかない。

石井山の御本陣へ、宗治殿のお首が、抱えられて来たと思うと、殆どすぐだった。

「よしつ。堤を断れ」

猿殿のお声は、わしのいた辺りまで聞えて来た。

断乎たる命令の一下。堤は断られて、百八十八町歩に漲り湛えられていた水は、新しい大河を作つて、凄まじい勢いを呈しながら氾濫し始めた。

同じ、御本陣を中心に——お味方の羽柴秀長殿の陣、蜂須賀彦右衛門殿の陣、福島正則殿の陣、浮田秀家殿の陣、黒田官兵衛殿の陣——そのほか旗差物のひらめく所、野といわず、山といわず、畑、林といわず、到る所から一斉に、引揚げの貝が鳴りひびいた。御本陣から吹きならす貝の音に応じて、各所の貝の音が答えつつ、全軍三万の兵は、堤を断つた水脚のように、踵を回して動き始めたのであった。

これとうたいしふ
惟任退治譜

一

「殿つ。殿つ……」

わしは持宝院の一室から駈け出していた。

猿殿のお姿を見かけたからである。

騎馬に召され、白地金欄の陣羽織に、具足は萌黄の緘、革胴は真つ黒な漆塗に箔を置き、長やかな太刀佩いて——

ひよいと、わしの声に、馬上から振向かれた。

「おつ、お願いでござります」

わしはわれを忘れて、お馬の口輪へしがみついた。旗本方が、

「退^すされつ」

と、叱ったのは、耳にあつたが、わしのその時の捨身を阻^{はば}み得なかつた。

「お……。いたのか孫平治」

猿殿の眼は、何用かとわしへ聞いていた。わしは、きのうから今日までに、ほんとに生涯の腹が極っていた。——が、金色^{こんじき}の千成瓢^{せんなりひさご}や、甲^{かちゅう}胃^{ゆう}の猿殿を、仰ぐのも眼が痛く、怪しく声は打ちふるえていた。

「おねがいです。てまえに、槍一本お与え下さい。——さなくば、お馬の口取りになと、お召抱えください」

「隨身したいか」

「出世を望みませぬ」

「何を望む」

「……………」

いえなかった。

猿殿がこれから馳せ向おうとする戦場は分っている。その敵へ、わしはぶっかかりたいのだ。——だが、その敵は、わしの旧主でもあった。

だから、何を望んで、と問われても、口にいえなかった。いえない苦しさが、涙になりかけた。

「……真の、真の人間に……武士に成り遂げたいのでござります」

やつといった。それだけでいい尽してはいないが、懸命でいった。

「よかろう」

猿殿は、後ろを見て、従者の槍へ片手をのばした。その槍を取って、わしの前へ、石^{いしづ}突^きを向けて渡された。

「つかわす」

「では……」

「手功^{てがら}をせよ。大きな出世を望むがいい。今を措^おいてまたとないぞ」

「あ、ありがたく存じまする」

「——が、そちには、秀吉が目ざす敵は突けまい。馬の口輪^{くちりん}を持て」

「……………」

意気地がない。どうしてこうわしも意気地がなくなったのか、涙があふれて仕方がなかった。

思えばわしももう年だ。二日も無性ぶしょうしていれば、顎あごにまばらな白いものがキラつく年だ。死に場所が大事だと思う。それにはこのお方の馬の口輪はぐから迷れないことだと思ひ極めたのである。

「気の弱い奴。老いたな」

猿殿には笑われながら、はや馬を進め出していた。

わしはあわてて、お後を慕い、それからまるで、疾風に巻かれて駆けている心地だった。

全軍は備前に入り、辛からかわ川村で各部隊の進路を決めた。

猿殿には、お旗本と手兵のみを率いて、全軍と別れ、矢坂越えから岡山を經、一気に沼の城まで急いだ。

途中の難儀は、いうまでもなかった。わけて福岡の川渡しは、雨後の大水であったが、猿殿には、御自身先に越えて堤に立ち、次々に、繰渡る人数へ、呶鳴っておられた。

「こぼすなよ。取落すなよ。かような時には、人ひとり失うても、平時の五百三百の損にもあたる。荷物一荷いっかは、百荷にも当るぞ。敵にも、あわてたりと、笑わるるものじゃ。心して渡れよ」

わしはもうお側から離れずにいたが、叱咤しったを聞くにつけ、自分の生命いのちも、可惜あたら、むだな所では取落すまいと思つた事だつた。

しんがり殿の森勘八どのは、ここで御人数に追いついた。そして、

「もう、御安堵ごあんどなされませ。仰せの如く、十二、三カ所も、堤を切つて立退きましたれば、毛利方の軍勢も、追ひ来る術すべはございませぬ」

と、報告した。

けれど、次の日、また次の日も、夜を日について、わたちの行軍は急ぎに急いだ。

二

後で思い合せれば。

敵の追撃がないと分りきつた後もなお、急ぎに急いでおられたのは、高松陣から踵きびすめぐを回

らすと同時に、猿殿のお胸では、まだ戦わぬうちから、逆臣光秀の軍とすでに戦っておられたのである。

こうして。

わたたちの兵馬は、西片上の浜べから、船へ移つて、赤穂^{あこう}に上陸し、七日の午頃、姫路城へ行き着いた。

迅かった。

わしらでさえも、ふしぎに思う。どうしてあんな大軍が、こう風の如く動かせるものかと。

清水宗治の自刃が行われたのは、四日の午^{ひる}まえだった。吉川、小早川の敵方へ、信長の死が伝わったのは、わずかそれから数時間の後——同日の午下がりに頃だったと、後で聞いた事だった。

しまった！

と、毛利方では、齒がみをしたにちがいない。

どうとうと渦巻く濁流の後にはもう、敵の一兵も見えなかったのだ。どんなに地だんだを踏んだ事か。しかし、余りに小気味よく計られては、無念というも、かえって愚かと覺

つたであろう。

それはそうと。

まる二日二晩、ぶつ通しに行軍しつづけた軍馬は、途中、強雨や出水でみずにも会い、泥のよ
うに疲れて、姫路城の内外にあふれた。

姫路城は、猿殿が、故信長公から賜たまうていたところの、居城であり、家庭であつた。

「お歸りなされませ」

ごがいせん
「御凱旋。おつつがもなく」

「ご祝着に存じ上げます」

留守居衆が出揃うて、大玄関にお迎えした。御凱旋ということばは、猿殿のお胸にそつ
た事ではない。だが、にこやかに、少し軽々しい程、にこやかに、

「やあ。やあ」

誰彼となく、いちいちうなず頷きを与えられて、泥具足のまま式台に踏み上がられ、そこです
ぐ聞いておられた。

「母君には、秀吉が留守の間も、お達者でおられたか。御機嫌はよいか」

「おすこやかにいらされまする」

留守居衆の一人、小出播磨守こいではりまのかみが答えると、

「女房どもは」

「お変りものう」

「そうか。いやそうか」

猿殿は、それを聞いて、長途の疲れも忘れた面持であつた。

「すぐ、湯殿へ通ろうか。この態てい——この戦いやっ寥れのまま、母君のおん前へ出ては、どこぞ体でも悪いように、母君がお案じなさろうで」

戦場では、さして気づかなかつたが、平和な城のお住いへ来てみると、猿殿のお声は、話よりも大きく、どこまでも聞えてくる。

大廊下をずかずかと、曲りかけられたが、急に思い出されたように、

「武蔵守、武蔵守」

お台所御用人、三好武蔵守を呼びたてて、

「食うぞ、食うぞ、きようは兵どもつわものも。炊事方、やっておるか」

「致しております」

「まだまだ、後より続々と到着するが——」

「薪と大釜のあらん限り炊かしいでおりますれば、御人数分は」

「たのむぞ」

「畏おそれ多いことを」

「久しゆう、戦場では、脂あぶらもの物に飢うえておる者ばかりじゃ。なお、行くてには、より以上な大難関が待つておる。魚鳥の肉など、ある限り城下より集め、足輕の末にまで、ふんだんに与えてくれい」

「心得ましてござります」

猿殿には、もう湯殿の杉戸を開けている。いちいち人手を待たないので、小姓たちはかえつて天手古舞てんてこまうのであった。具足を脱いで、ずしりと置くと、乾いた泥がこぼれ落ちる。湯もまた早い。

どこを洗ったでもなく、たちまち真つ赤になって出て来られた。鎧よろい下の肌着いしただけはお代えになったが、具足は、新しい物がそこへ取揃えてあるにかかわらず、風雨によぐれた古い方を着込んで、

「小姓」

と、滴したたる襟の汗を拭いながら吩咐いいつけた。

「出陣は、明早朝と——表方の者に触れるように、すぐ伝えておけ」

湯殿の次の揚屋あげやに腰打ちかけたまま、さらに、金奉行かねぶぎようを呼びにやられた。

「いくらある。城内の蓄えは」

金奉行は、即答して、

「銀子七百五十貫、金子八百余枚ほどござりまする」

「それを皆、蜂須賀彦右衛門に渡せ。——彦右衛門の手より、番頭ばんがしら、弓、鉄砲、槍の

者、小荷駄、足輕どもへまで、知行に应じて、残らず分配せいと申せ。——秀吉の手許に、

一分一厘も残しておくに及ばぬぞ」

そこへ、奥の侍女こしもとが来て、

「御母堂さまが、一刻の間いっときも早う、御無事のお顔見たいと、待ちかねておいでなされま

するが」

「おお今参る。……もう暫しばしと、母君を皆してお宥なだめしておいてくれい」

金奉行が退さがるついでに、附けてやった蔵奉行くらふぎがもうそこへ来て控えていた。

腰かけたまま、籠手脛こてすねあて当の紐など、左右から小姓に結ばせながら、

「蔵米は何程あるか」

「八万五千石の記帳と相成っております」

「うむ、八万……」

猿殿には、ちよつと胸算には積れないらしく、無造作にこういった。

「今日から大晦日おおみそかまでの分とし——日ごろ、扶持ふち取る者どもに、扶持高、五倍増しにして頒わけ与えい」

「……と。御陣先の、兵糧はいかがなされますか」

「兵糧は無用。こんどの戦場は、食い物の多い所とほぼ知れている。——それよりは、後に残る弓、鉄砲の足輕小者の妻子どもに、煎せんじ茶の一ぱいもゆるりと飲ませてくれたが増し……。心得たか」

「はっ」

それで、風呂の中でした考え事は、すべて、附け終つたらしくある。猿殿は、さもさも、爽すがすが々したように、奥へ急いで通られた。

道をちがえて、続々と引揚げて来た各部隊は、大手、中門のあたり、二の曲輪くるわから、御本丸の広場にまで、満ち満ちていた。

久しぶりに脂あぶらの浮しるわっている汁しるわん椀と、にぎり飯とを両手に持って、兵たちは、明日あすの空あいを眺めていた。

夕雲が赤かった。梅雨つゆも霽あがろう。どこか風もさばさばと感じられる。ふと、開け放たれているお広間うかがを窺うかがうと、猿殿は、御舎弟の秀長様とお揃そろいで、御母堂の前に出られ、何か笑い興きじながら、兵と同じような粗末なお菜で、湯漬ゆづけを食あがっているのだった。

「久しぶりよの」

御母堂も、箸をとっておられた。秀長様も御相伴ごしょうばんしている。開あけ放はなつてあるので、彼方で兵が食くべているのも見えるし、兵の方から見通みとおしなのである。

こういう有様は、わしはこの大名方の家庭でも見た例がない。思い出すも胸が痛むが、光秀殿などは殊ことさらに厭いとう事である。眉をひそめて、下賤げせんというに違ちがいない。

だが、猿殿のお姿からは、下賤げせんなどという感じを受ける前に、美しさ自由さを感じる人間の姿のほうが先へ迫せまってくる。わしは物蔭かげから、茫然と見とれていた。

「戦いくさ、また戦と、留守がちでござれば、母君にも、間まには、お寂さびしゅうございましょう。」

お歌は、ちつとは、進みましたかな。舞など、稀 《たまたま》には御覧なされますか」

「勿体ないこと、そなたが戦場に臥ふしてあると思えば」

「そんな御遠慮は、わが子に御無用なこと。妻のおすすめが、不束ふつつかなのでござりましよう」

「あれには、ようして賜たまるに、なぜ其方そなたは賞ほめておやりなさらぬ。よいしないことを」

「はははは。母君その辺、お案じはいりませぬな。女房には蔭かげでいうもの。のう、秀長」

「ははは。そうかも知れませぬ」

「美味うまい。こうして戴く、湯漬の味はかくべつ。……ここへ戻れば、母君とも二夜三夜は、甘えていとうなるが、楽しみは後のこと。またしばらくはおさびしくも、御機嫌よう留守をたのみまする」

「すぐにまた、御出陣か」

「されば、明け方にも」

「やれのう、御苦勞なことではある。わしはよいが、彼妻あれは名残も惜しかろうに、なぜここへ政所まん殿は呼んであげなさらぬ」

「会いたい妻は、足輕どもも持つておりますので、ここは我慢のしどころかと。——あは

はは、彼女^{あれ}にも、悪う思うなど、母君からよう申しおいて下され」

笑っているそのお口で、先刻、猿殿は御留守居衆の^{こいではりまのかみ}小出播磨守どのや、三好武蔵守どのを集めて、こう正直に告げておられた。

（敵は強兵じゃ。逆賊とはいえ、光秀もわしを^{むか}邀えたら、その一戦が彼のわかれ目じゃ。

光秀の智謀才識、到底秀吉の遠く及ぶところでない。わしはただ順逆を学び、天道を奉じ、亡君の弔合戦^{とむらい}ぞという捨身があるばかり。もしこの一戦に、秀吉討死と聞えたなら、母も妻も、そちらの手で、^{いさぎよ}潔う処置してくれい。城は火となし、小屋一棟も焼き残すなよ）

それを、伝え聞いた将も兵も、みな血を^{たぎ}沸らせて、^{まぶた}瞼を熱くした様子である。その猿殿のお胸のう치를思い、湯漬を共に^{あか}食りながら、出陣までの半夜を、母に侍して機嫌を取っておられるのを見ると、わしは事もなげなその笑い声を、^{よそみみ}他耳に聞いてはいられなかった。

同時にわしの欣びは裏書された。——このお方のためというては狭いが、このお方が喜びを整理し支配してくれたら、世の中は明るく強く美しく、真の平和になろうと信じられた。その馬前に死ぬことは、無駄でないと心を固めさせられた。

わしのみではあるまい。

恐らく、三万の将兵は、みな等しい気持を誓っていたに違いない。

まよなか
真夜半を過ぎると――

早くも一番員が鳴る。二番員が鳴る。

陣列、馬揃い。そしてほどなく、先鋒の部隊から、徐々じょじょに、東へさして進軍しはじめた。

大手口の欄干らんかん橋に、床几しょうぎをすえて、猿殿は、出陣隊伍を閲兵えつぺいしておられた。

ざく、ざく、ざく……

足なみは、一糸みだれぬ音を刻み、猿殿の前を無限に流れて行く。

死に場所へ。

死に場所へと。

だが、その前には、やがて播磨灘はりまなだの闇をひらいて、大きくさし昇る太陽の祝福が燦さんとしてあった。

死に場所へ。死に場所へ。

わしも大股に隊伍の中に交じって歩いた。真に生きんがために、大地を踏みしめて歩いた。

青空文庫情報

底本：「柳生月影抄 名作短編集（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2007（平成19）年4月20日第12刷発行

初出：「週刊朝日 創刊一千号記念特別号」

1939（昭和14）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

茶漬三略

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>